

Freaks 世界一幸せな  
日記の最終頁

サングレ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

何一つ噛みあっていない少女青年年齢詐欺ヤブ医者ギャグしたりシリアスしたりする。

「緩々と頭使わずに読めるし描けるしそもそもあんま読み返してない」を基本スタンスに深く考えず見切り発車。

# 目次

1 話	発端	1
2 話	潜入	19
完全なる落日、黄金の夜明け		
1 話	落日	46
2 話	真夜中	111



## 1話 発端

常界 中心街 チトセ探偵事務所

午後1時。三階建ての雑居ビルを丸ごと利用した事務所から見下ろす街並みは柔らかな陽射しを受けて心地の良い雰囲気醸し出し、人々と警備用ドライバが交差する。

さて、和やかな陽気の中、偏屈な客しか寄り付かないこの事務所に珍しく真つ当そうな客がやって来た。

銀髪をオールバックにした少し硬派な印象を残す少年だ。

「俺はギンジ。世界評議会の最高幹部を務めている」

この世界に於いては他に比肩しようないその名乗りに対する、和装の女性であり私立探偵チトセは和かに微笑むだけだ。

「ウチはチトセ。見ての通り探偵をやつとるしがない一市民さかい……幹部はんが何の用どすか？」

傍目から和やかに受け答えしている様に見えるがチトセは内心疑問に思っていた。

探偵としてはマイナーかつコアな客しか寄り付かないチトセの居場所を良く突き止められたなと思つたのだ。

常連の誰かが教えたのだろうか？ その疑問は次の発言で解消された。

「極東庭園のフジに、貴女の事を教えてもらった」

あの野郎

水の庭園の主人にして極東一の情報屋でありチトセの飲み友達でもある水花獣フジ。

しかし少々茶目つ気があり悪戯心も持ち合わせている為、チトセに解決出来るギリギリのラインで危険な仕事を仕向けてくることもある。

「……フジ、他に何か言つとつた？」

「力で解決するに限れば一番信頼できる人間だと。これを」

差し出されたのは折り畳まれた紙。受け取り開く。

『割と世界がピンチです。あとはよろしく頼みます。フジ』

懐のマッチ箱に手が伸びかけたのを寸前で止めた。逆説的に考えれば「フジはギン

ジを信頼し、その上でチトセを紹介した」とも言える。

「……依頼を聞こか」

「この依頼自体が、聞くだけで世界の裏側を知る様な事だとしても？」

「何を言うてはるん。ウチはもう引き返せん人種なんよ。その辺理解しとつて、ウチに声掛けたんちゃう？」

ギンジはチトセを見、そして一度目を瞑つて……もう一度開いた時には何かを決意した様な意志の強い目をしていた。

「俺の友人の話聞いてくれ」

そう切り出したのは5人の友人の話と、最近騒がれている聖なる扉解放の顛末だ。

放浪の末に出会った5人の事、円卓の騎士との接触と交戦の事、竜王ノアの一族である夜汽車の門番達の事、庭園の事。

そして、扉に向かった事。

扉で起こった事。

時間をかけて丁寧に丁寧にギンジは説明した。

話している間に知らず知らずのうちに目線を下げていたギンジがチトセの方を向くと、いつの間にやら吸っていた煙管を片手に頭を抱えていた。

「……なんか悪い」

「ええんやで。ちよつと話のスケールが想定の5倍ぐらい大きくてな、飲み込むの大変なんや……」

煙管を一口吸って煙を吐き、呼吸と思考を整えてチトセはギンジに向き直った。

「つまり、ギンジはん。あんたはんの話から推測するとウチ……若しくはウチらを戦力として数えたいんちゆう訳やな」

「ああ」

「戦い続けなはるんやな」

「ああ……だからこそ、力を借りたい。神殺しのチトセ」

決意は硬い。その名を口にする事こそが、証明だ。その実直さにチトセは擦ったさを感じた。

「ギンジはん。ウチみたいなの外道を頼ってくれはって、おおきに。覚悟が確かなのも十分解つたで。でもな、心に留めとき？」

「だからこそ、これだけは言っておきたかった。」

「何もかも、手遅れになる可能性はゼロじゃないんよ。やれる事全部やって、命も擦り減



らしても……逆にそれが裏目裏目に出て一番悪い結果になる事も捨てきれへんのや」

行動している時はわからない。良かれと思つて動いた結果、それが大切な人の首を絞め上げていたなんて良くある事なのだ。

「それも含めて、解つてはるんやな？」

少し、意地の悪い問いだったかもしれない。しかしギンジは真つ直ぐにチトセを見ていた。

「立ち止まる気は無い。引き返すつもりも無い。今はただ、前へ進むだけだ。それが全ての努力が無に還る選択だとしても」

その答えを聞いたチトセはとても優しく笑つた。

「よろしおす。この神殺しの刃、貴方に預けましょう、ギンジ」

静かに、お互いに握手を交わしあつた。

??

「そないな事で長期戦や気張りいね」

「軽過ぎて不安しか無いのですが」

ギンジが去った後の事務所。

世界を左右するような依頼をサラツと受ける上司に辟易する少女、ロレッタ。

「逆説的に……評議会の秘密、ゴシツプ記者に売りつけたら稼げると思わん？」

「シリアスからそうやって金の話に持つてくのがチトさんの悪い癖ですよ」

「何を言うてはる？ このご時世探偵なんて儲からんのよ、積極的に金稼ぎや。プライドで腹は膨れん」

「貴女なんで探偵やってるんですか……」

大して金に困っていない癖に妙に金に執着がある。ロレッタは及び知らぬ事だが、チトセの普段着である着物には呪術的な加工が施してあり、その値段も安くは無いのだ。

「せやせや、ロレッタもそろそろ暴れたいやろ？ 潜入したいやろ？」

「いえ、私は」

「貿易会社ひっくり返したの、何年前やったかなあ」

「……」

「詐欺紛いの手口で完全外部者が社内崩壊とか痛快やなあ」

「あ、あの時は生体実験の資料に興味があつて保管されてるって聞いたから、聞いたか

ら」

視線を逸らしながらロレッタは言い訳する。チトセはにっこりとしながらトドメを刺した。

「次は評議会やで？ それ以上が……」

「それ以上が……？」

「出てくるで」

「やります！」

即答。頭を抱え悩ましながらも欲求には勝てなかった。

ロレッタの欲求とは、つまりは情報収集欲だ。野次馬の上位交換とも揶揄されるその欲は時として裏社会や企業すらも崩壊させるほどだった。

「うっしそうと決まれば行動や！ ジョシユアも引き込みましょ」

「ナトリ先生は？」

「魔界に行かはったよ」

「この情勢が不安定な時期に……」

×××

常界 西区中央図書館

「お前さあ……本当さあ……」

「笑えよ」

翌日から各々が情報収集を始めた。尚、朝からチトセは裏を当たると言つて終息不明な為、ロレッタともう1人の助手であるジョシユアは2人で行動を開始した。

「それつてTRPGにおける導入じゃん？ そんな『あ、コンビ二行こう』みたいなノリで世界機関調べる……?? 世界大丈夫？ こんな奴にどうにかされちゃうの俺嫌なんだけど」

「お前本当にCOC好きだな」

「何好き?」

「ネクロニカ」

整備され尽くされた中央図書館は森林公園が隣接する建物だ。読書スペースの窓の先には青々とした木々が聳えている。

情報社会の昨今ではあまり需要が無くなってきたこの場所は昼間だというのに利用者には少な目だ。

「と、いうわけでお前の大好きなC.O.Cの情報収集に従って二手に別れる」

「わーいリアル図書館&目星だー」

「ファンブルなよ？ ジョシユアは新聞、私はゴシップ雑誌を漁ろう。……じゃ1時間後に読書スペース……いや話し声が響くな、1階の自販機前で」

「おっけ」

そう了解しあつてロレッタは雑誌スペースへ歩を進めた。ジョシユアはその背中を見送つて検索機の前に立つ。青く光る操作盤と待機中を示すホログラムディスプレイ。新聞のカテゴリを引つ張り出し、暫し考える。

直接的に切り込みたいが、聖なる扉自体はまだかな……評議会が手持ちの情報じゃ心許ないな？

『評議会』と検索すると、ここ3ヶ月の記事が大量に現れた。内容は最初期は隠蔽をしていた評議会への非難、中盤からは最近に掛けては内部組織の解体、設立等に移り変わっていた。

『聖王アーサー行方不明か』という記事もあった。

——最高幹部の1人だったよね？

それらの見出しをプリントアウトした後、試しに『最高幹部』で検索をかける。

『聖なる扉を閉じた英雄 ギンジ』『取材応じず、職務に集中か』というものの他に『前

任者指名手配』という物騒な見出しが出てきた。

気になり棚番号を確認して新聞独特の匂いがあるスペースに行き、バックナンバーを手にとって広げた。

指名手配されたのはアーサーでは無く、同僚のオズという竜であり、扉を開いた者たちの1人。現在は生死問わずで指名手配がされている。

他にも扉を開いた人物はいて、オズ以外全員が人間という。画質が粗い手配書にはジョシユアと然程年が変わらなそうな3人の少年少女と道化師の格好をした男性が写っていた。

スマホで写真を撮り新聞を元の場所に戻した。

きつちり1時間後。自動販売機前で2人は落ち合った。

「暗いし寒いし何だこり」

「日当たりが仕事しねえ……外のベンチ行く?」

「オツケー飲み物も買う! 人参ソーダ? ナニコレ旨いのかな?」

「私はコーヒード」

図書館を出ると細やかだが日当たりのいい緑化スペースに幾つかベンチが設置してあった。その中でも1番見晴らしが良さそうな場所を選ぶ。隣の森林公園で遊ぶ子ども達の姿がよく見えた。2人同時にプルタブを開けて一口飲み、ロレッタから切り出

した。

「何かわかった？」

「扉が開いて評議会旧体制崩壊。傘下組織解体か――の――新組織設立。あと前幹部行方不明と指名手配」

「言わんとしている事は何と無くわかる」

差し出されたスマホの画像とジョシユアのやる気の無い説明から大体の事を察する。

「そっちは？」

「聖なる扉についての陰謀論が盛ん。人間と竜が頑張った程度で開けんのかってドツタンバツタンの学派騒動。あと、現最高幹部のギンジ……依頼主が戦犯と面識あるんじゃないかってのが多数。バレかけてるやべえ。最高幹部の秘書面接で重傷者多数……とか。正直、表のめぼしいものなんて無い。出版会社通してる点で検閲入ってるっぽい。頼みの綱はチトさん」

「ごめん最後の何？ 重傷者多数って？ え？ 面接で？」

プリントアウトされたゴシップ記事を手渡される。見出しはそのまま『最高幹部付き秘書試験重傷者多数 倍率高騰』

良く読むと現在最高幹部の秘書が決まっておらず募集中だが、その過程の試験の実

戦試験で重傷者を負う者が続出しているという。

かなり扇情的な書きっぷりで信憑性が怪しいが、ロレッタが持ってきたという事は真実に近いのであろう。

「え……？」

「意味ワカンねえだろ。重傷者多数どころか2桁行ってるってよ」

「意味ワカンない何それコワイ」

「噂じゃ最高幹部様直々に試験してくれんるだとき」

「何それめっちゃコワイ。え？ ブラック？」

「純粹な黒っすね」

「ギヤアアー」

お互いに表情を動かさないうまま受け答える。思った以上に情報が封鎖されている為か、収穫が美味しくないゆえに気力が削がれていく。

対比されるのは暖かい日差しと子供の声。あまりにも両極端である。

濃厚な陽気の中、次に何処に向かうか考えていたジョシユアはふと思いつく。

「……ねえ、評議会の図書館行ってみない？ 大元でどんな情報管理がされてるか見てみたい」

「採用。行くか」



立ち上がろうとしたロレッタはどうしても聴きたかった事を尋ねた。

「人参ソーダ旨い？」

「意外に旨くて頭が混乱してる」

×

中央図書館最寄駅から電車で30分。評議会庁舎6階に存在する総合図書館は中央図書館と比べ物にならないくらい広大で清潔で活気がある。今の時間は調べ物に訪れる学生が多い。

「広っ、明るっ！」

「同意する。ジョシユア初めて？」

「初めて」

検索機がズラリと並んだ姿は壮観だ。ロレッタはそのうちの1台の前に立ち慣れた調子でキーボードを操作する。

「すげえ、キーボードまでホログラムだ」

「中央はキーボード普通だしな。さて……どうする？ 直接行くか？ 新聞？」

「もう直接行っちゃお。新聞新聞」

新聞カテゴリーを選択し、『評議会』と打ち込む。しかし検索結果は中央図書館と変わらなかった。

「うーん？」

「まああれだ。発行数が少ない地方の新聞も追加されただけだ」

「そだね」

「無駄足か……」

「そだね……とりま検索結果パシヤる」

「頼む」

ジョシユアがカメラ機能で撮影している間、ロレッタは図書館内を見渡した。

やたらと職員募集のポスターが至る所に掲示されている。

「そこまで職員不足なのか？」

よく見てみるとアカデミー職員から上級管理職まで。噂の最高幹部付き秘書の募集もあった。近寄って読むと応募資格はかなり緩く、枠は2人。

「仮にも最高職の秘書の応募資格がこれだけか？ 何かキナ臭いな。」

「ロレッター。チトさんから電話、集まれる？ っつて」

「通話中のスマホ片手に近寄ってきたジョシユアが告げる。」

「集まれる」

「おっけー。もしもしちトさん？ 駅ビルのファミレスで良い？ ハイハイそれじゃ」

×××

中心街 ターミナル駅ビル

しばらくしてチェーン店のファミレスに3人は集まった。

注文を受けた店員が去るのを見送って先ずは図書館に行っていた2人が報告を始めた。

「これがこの1ヶ月の新聞記事の見出しで、なんかもうニュースでやってんのと変わらない感じっス。あ、行方不明の最高幹部の件とか、指名手配犯の写真とか？」

「ゴシップの方は聖なる扉についての学派論争、英雄ギンジと戦犯の関係性。最高幹部付き秘書の面接で重傷者多数」

2人の話に頷きながら聞いていたチトセは今度は自分の番、と手帳を取り出して切り出した。

「こつちは2人の話の裏側やなあ、おもしろい話聞けたで。行方不明の最高幹部アーサーからなあ。奴さんは元々この育ちじやないらしいで？ 天界育ちなんて推測してる奴もおる。出生には色々悪い話があつて今回の行方不明にも関係している……なんてな」

注文の品を受け取り、早速焙じ茶を啜ってから続ける。

「それに関係してたんはロキつちゆう神様や。どうも評議会の重役の身内で、もう1人の最高幹部のオズ？と3人の子供を指名手配にしたのもこれや。こつからは内密に頼むで？」

真剣な表情と周りに聞こえない無声音で告げた。

「ロキはアーサーと結託して扉を開きはった、て噂が裏で立つとるんや」

しん、と雪がちらつく様に静寂が降りた。

コーヒを啜ったロレッタは暫く渋い顔をする。

「キナ臭いのはわかりました。1ヶ月前に聖なる扉は開かれ……閉じた？ しかしその中で評議会に混乱が生じた」

「せやなあ、それで正解やと思う。円卓ナイツ、オブ、ランドの騎士の活動が表に出なくなつたのも、仕える

相手がいないからつちゆう事やね」

「彼らはアーサー王に仕えてこそ、ですからね」

「6章……日中ゴリラ……うっ、頭が」

臆げにアーサー王物語を思い出すロレッタとスマホゲームの内容を思い出し頭を抱えるジョシユア。

「掘れば掘るほど危ない話が出てくるなあ。評議会が職員大量に募集してるの知つとるよな?」

「あー、総合図書館にめいっばいポスター貼ってましたね。人員入れ替えでしようか」「せやせや。色んな層入れ替えとるらしいわあ」

立ち直ったジョシユアがハンバーグを齧りつつ呟く。

「もう既に隠蔽臭が……」

「表向きには一新した管理体制で世界を統治する、みたいなモンやけど実情はそうやろうな」

「このビッグウェーブに乗って就職すつかなあ。事務処理なら前の仕事で鍛えたし実戦経験あるし」

「お、件の幹部付き秘書の募集要項満たしとるなあ。アレ、本気でヤバイのは片方だけみたいやで? 男の幹部と聞いたわあ」

ロレッタは男の幹部と聞いて真つ先にギンジが浮かんだが削除した。既に秘書がいると聞いているしだからこそその空きが2人なのだろう。

「じゃ、その秘書募集、応募してみますかね。ここら辺で一発ドカンと潜ってみたいですよ」

「それでウチがロレッタが持ってきた情報で一発ドカンと稼ぐんな？ あいわかった」

「アンタ本当に探偵？」

「で、真意は？」

ニヤニヤと笑うチトセ。ロレッタは迷うフリをした後、ほんの少し意地の悪い笑みを口元に浮かべた。

「仕事云々の前に情報マニアなんでね。ま、死なない程度に頑張ります」

「長生きしないよ……序でに碌な死に方しないよ……」

「お前もそうだとジョシユア」

「まあね！ 探検家なんて老衰で死ねないよ！ 滑落事故か溺死か餓死だね！」

口の悪さを隠そうとしないロレッタと機嫌よく受け答えるジョシユア。その微笑ましいやり取りを見て何を思ったのかはわからないが、チトセは静かに微笑んだ。

## 2話 潜入

### 評議会庁舎受験者控え室

「言っちゃ悪いが……え、評議会の秘書試験ってこんなもん？」

「お前情報マニアだからだろ。結構難しかったけど……秘書試験なんて初めてで通常難易度がワカンない」

「私ら探偵助手なのにな」

「助手って何だろうね」

「新鮮な肉盾？」

「やめて？」

筆記試験を終えたロレッタとジョシユアは待合室のベンチで駄弁っていた。

待合室は地下4階にあり、窓のない部屋は自動販売機のモーター音が静かに響いている。

「戦闘力超重視系？ だったら私今回無理そうだな」

「俺もだ……」

2人の他にも複数人候補者がおり、それぞれストレッチや武器の確認を入念にしていた。年代も性別も、或いは種族もバラバラだが。皆一様に静かな闘志を湛えた瞳をしている。

筆記試験が終わり次第、実技試験だ。2人がほぼ同時にここに来てから複数人見送っている。

「ロレッタ、武器どうした？」

「私は拳銃だ。試験は実弾許可が下りてるから遠慮なく持つて来た……ジョシユアは？」

「これー！」

そう言つて金属球を掲げ、光の力を注ぐと二丁一対の拳銃が現れた。表面を覆うように走る溝にはエネルギーが目に見えるほど循環している。

「ああ、それか」

「俺が一番信頼するドライブだからね。勝負どきにはこれをつて決めてる」

かつて、光の天才に制作してもらったと言うジョシユアお気に入り拳銃型ドライブ。連射機能を極限まで高める為に通常の2倍のエネルギー循環ラインが付与されて



いる。

———　　「そういえば光の天才も評議会所属だったな。こここの所ドライバ技術者の話をめつきり聞かないような……？」

後で調べようと心に決めたロレッタ。

1人、また1人と候補者は呼び出され、待合室には2人だけとなった。

そそくさとジョシユアがドライバを定位置に装着した直後、2人の役員が2人を呼びだした。

案内に従って部屋を出てエレベーターで更に下へ。ますます照明が重苦しく感じるリノリウムの通路の突き当たりは二手に分かれていた。

「こちらからはお1人ずつの試験となります。規定は無いので好きな方をお選び頂きます」

———　　「なるほど、だから役員さん2人なんだ。」

ジョシユアは1人納得した。それはロレッタも同様だった。

「ジョシユア、好きな方選んでいいぞ」

「わーいじゃー右行きます」

ジョシユアは右の通路へ。ロレッタは左の通路へ歩き出す。

ロレッタと別れ役員に大人しくついて行くジョシユアは向こう側から歩いてくる

人影に気づいた。厚手のタオルで滝の様な汗を拭っている。顔立ちから待合室で見かけた候補者の1人だとわかった。

「お疲れさまでーす」

立ち止まつて候補者に声をかけた。役員も立ち止まり、2人の邪魔にならないよう壁際に退いた。どうやら時間に余裕はあるらしい。

彼もジョシユアを見かけていたからか、立ち止まつて片手を軽くあげた。それなりに鍛えた体つきをした男性だ。年はジョシユアより上に見える。見るからに温厚で気さくな雰囲気醸し出している。

「よお、坊ちゃんはこちらからか」

「これからです。どうでした？」

「いやー凄かったね、命の危険感じるくらいさ！ あんな細身のどっからあんな力出るんかね！ 坊ちゃんも頑張れよ！」

手を振りながら去って行く候補者に一礼して、再び歩き出した役員について行く。

細身？

数日前のチトセの「ヤバイのは男の方」という発言を思い出す。細身の男か、それとも女か？ 最高幹部の座は英雄ギンジともう2人。つまり上記のチトセの発言から察するに男2人に女1人。

態々「男の方」と言ったからには内訳はそれで

合っている。

推理をしているうちに1つの扉に辿り着いた。

「ここから先が演習場です。試験官との実戦となります。準備はよろしいでしょうか？」

「バツチリです」

「了解しました。では……」武運を！

愛想よく役員は言い終わるとパネルを操作して扉を開けた。見た目に反して軽い音を立てて開いたその先に踏み込むと、軽い音を立て閉まった。

照明は薄暗い。しかし心地よい静けさだ。ジョシユアの靴が軽快な音を響かせる。最後の扉は手動式で、ジョシユアは観音開きの扉を両手で開け放った。

そして不意に開けた空間。正しく演習場の体をなしたその中心にいた女性は真つ直ぐにジョシユアを見据えていた。

左右違う色の神秘的な双眸。濃い紫の髪を一括りにまとめ、とても動きやすい服装をしている。片手には丈夫そうな鞭。どうもドライバでは無さそうだ。

「お前が最後か」

「はい、よろしくお願いします！」

凜とした声に、背筋を正したジョシユアは出来るだけ明瞭に答えた。

その姿に女性は口元を緩めた。

「ああ、最終試験だ。全力でかかって来い！ 遠慮はするなよ！」

ヒャン！ と鞭が一振りされる。ジョシユアは構えを取りながら、自分以外の事で異常に焦った。

やばい、ロレッタがハズレを引いた!!

ロレッタは役員に着いて行きながらもその観察をやめなかった。出来るだけ視線を気づかれないように。

どうもこの役員は何かに怯えている。出来るだけ無表情を作っているようだが口の端の震えが隠せていない。

それは確実に自分の身にも降りかかる事だろうとロレッタは確信していた。

不味いな、コレはハズレ引いた。長期入院も視野に入れとこ……。

割と運はいい方だと思っっているのだがどうしようもない確率で悪い方を引く。しかもそれは自分の生命に関わる事の時だけ。

そんな思考をしているうちに扉の前に来た。

「ここから先が、演習場、です。準備は、よろしいでしょうか……？」

「何時でもどうぞ」

視線を下に、震える声を律しての問いかけ。いつそ哀れなほどだ。

震える手でパネルを操作し、軽い音を響かせて扉が開いた。

「どうか、(無事で)」

役員の精一杯の声がけ。それを背中に受けてロレッタは踏み出した。背後で軽い音を響かせて扉が閉まる。

近づけばセンサーで開くのだが、閉じ込められたと錯覚してしまう。

薄暗い照明に冷気の満ちる通路。一番奥に観音開きの扉が見えた。一步踏み出したその瞬間。

「ぎゃあああああああああああああああああああ!!!!!!」

響き渡る悲鳴と何かがのたうちまわる音。瓦礫を崩すような音が一緒くたになつて通路に響き渡る。

反射的にロレッタは駆け出した。コートの内側からデザートイーグルを引き抜き装填して両手で構える。駆け出した勢いを殺さず、バネの様に身体をしならせ手動式の観音開きの扉を思い切り飛び蹴りで開け放った。

横滑りしながら着地して、前にデザートイーグルを構えて、絶句した。

竜の形をしたドライバが3体、その足元に転がる1人と完全に腰が引けたまま発砲

を続ける1人。明らかに恐慌状態を起こしている。

そしてその光景を楽しそうに見つめる男が1人。

「チツ！」

瞬時にやるべき事を考え終えたロレッタは倒れている1人に駆け寄り、援護射撃をしながら恐慌状態の1人に怒鳴った。

「もういい逃げろ！ 早く！」

こつちを見た瞬間出口を指し示してやれば悲鳴をあげて拳銃を投げ出して転がるように走り出した。床を滑ったそれはロレッタの足元まで届く。

「あとこいつも頼む！ 扉を閉めろ！ 振り返るんじゃねえぞ！」

完全に意識を飛ばした血塗れの候補者をありつた力の力を込めて投げると、出口に辿り着いていた候補者が受け止め、扉を閉めた。

ともかく、これで荷物は無くなった。自分に集中が出来る事で生存確率は飛躍的に上がった。男から目を離さぬようそつと足元の拳銃を拾い上げる。グロツク17、最近のモデルの様だ。この試験に向けて新調したように使い込まれた形跡はない。重さからして残弾は6か7が妥当か。

—— 人生最悪級のハズレ引いたぞこれ……。

場の中心に立って静観していた男へ銃口を向ける。緑色の少し長めの髪、目を隠

すような帽子に柄の派手なスーツが嫌に似合う長身の男だった。

「なるほど、君が最後の候補者か。いやはや最高の手腕だ……尊敬に値するよ」

乾いた拍手を送る男。冷笑とも微笑とも判別のつかない笑みを浮かべていた。爬虫類じみた狂気的な光をたたえる瞳にロレッタは知らず知らずに生唾を飲み込んだ。

人では、無い？ 複合種族……混種族か？

「そんなに警戒しなくていいよ。ただの試験なんだから」

「……こんな血塗れな場所では説得力がありませんよ」

「酷いなあ。よく見てれば避けれる相手なんだが」

男を中心に機械音を立てて旋回する3体の竜型ドライバ。骨組みに張られたレザーの翼が血の匂いを含む空気をかき回し静かにロレッタの髪を撫でた。

確かに観察すれば完全にプログラム管理下に置かれているようだ。逃げ回りつつ様子を見れば何とかなるかもしれない。

そこに行き着くまでに腕の1本犠牲になりそうだが。

「冗談はさておき。今でも君が此処にいるのは試験を受ける気があるからだろ？ ……  
なら、全力でかかってくる来るといい」

台図とばかりに男は片手をゆらりと上げる。そして勢いよく振り下ろした。

「その蛮勇を俺は歓迎しよう」

同時に唸りを上げ飛翔して来る三体のドライバ。ロレッタはジャケットの内側から拳銃と入れ違いに金属球を取り出す。風が渦巻き形を成した箒型ドライバを前に構え、思い切り走り出した。

評議? ??????  
評議会庁舎第16演習場

降り注ぐドライバの雨を直感だけで掻い潜る。電撃で爆発的に加速しギルガメツシユの後ろに回り込み、その背中に一撃を与えようと足を振り上げて――

「そこまで」

寸前で止めた。ジョシユアの後頭部には展開されたドライバが突きつけられていた。

ギルガメツシユは髪をなびかせながら振り返って笑ってみせた。

「賞賛に値する。瞬発力ならどの候補者にも勝ろう」

ジョシユアの身体はその意味を理解した後、ゆっくりと力が抜け崩れ落ちた。遅れ



て滝のように汗が流れ出る。両手の中でパチリと電流が走り、ドライバはただの金属球に戻った。

「こ、こわかった……」

「はっはっは！ 以外に小心者だな」

「だって滅茶苦茶強いですもん貴方……」

自分の整理が落ち着き、立ち上がり、礼を言おうとした瞬間ロレッタの存在を思い出した。

「やばい……！ あ、あの！ 実はゆ、友人？ と一緒に試験受けてまして！」

「ほう」

いまいちロレッタを友人と認識していなかった為、形容に詰まった。

「もう1人の方へ行つたんですけど大丈夫ですかね!? 生き残れますか!?!」

「……それはマズいな」

「えっ」

「殺しはしないさ、彼奴も」

目を逸らしたギルガメッシュにジョシユアは頭を抱える。彼自身もかなりの時間を消費している。今から行っても間に合わないだろう。寧ろ彼方の方が早く決着が付いているかも知れない。

「ロレッタ……」

祈るように呟くするしかできなかった。

???????

### 評議会庁舎第17演習場

空中でばら撒かれた小型爆弾が炸裂する。翼部を爆破された竜型ドライバが轟音を立てて墜落する。

「あとひとつ」

箒型ドライバを立ち乗りで操り最後の1体から迅速に離れる為に上昇するロレッタ。その手の中には最後の小型爆弾が握られていた。1体壊すあたり6個を計2回。1個では陽動にもならない。

—— さあ、どうする。

地上でこちらを見上げるベオウルフをチラリと伺う。口の端に笑みを浮かべたまま動く気配は全くない。既に手駒は1体というのに余裕の表情だ。

—— 観戦だけで動くつもりは無いのか。好都合だむしろ動かないでくれお願い

—— します……！

竜型ドライバが大口を開けて飛び込んでくるのを急降下して器用に避ける。ガチんと歯がかち合う音が降ってきた。

この竜型ドライバ、完全プログラム式で何処を破壊しようが移動手段がある限り無制限に襲いかかってくるという恐ろしい代物だ。だが逆説的に翼さえ壊してしまえば箒型ドライバで飛べるロレッタは優勢となる。

1体目破壊の時、試しに頭を完全爆破してみたが、そのまま突撃してくるという狂気的な光景が繰り広げられた。

しかし頭部に重要な回路でも埋め込まれているのか、再起動するまでに僅かなタイムパラドックスがあった。時間にしてわずか3秒。

やろう

一度旋回して竜型ドライバに真っ向から突っ込む。鋭利な刃をのぞかせるそれと刹那、ほんの僅かに上に逸れすれ違いざまに脱いだジャケットを頭部に投げつけた。

ジャケットに縫い付けられていた大量の爆弾の信号とロレッタ自身風の力が走り一拍置いて爆発を起こし爆風などでは生ぬるい衝撃が空間を震わせた。

爆風を乗りこなしナイフ片手に一直線にベオウルフに飛びかかり、勢いと限界点まで噴き上がった殺意に身を任せて横滑りに振るったナイフは右肩から左肩にかけて横断して切り裂いた。

鮮血が舞う。やった、と確かな手応えを感じた次の瞬間に右脇腹に冷たさを感じ、間も無く強烈な熱と痛みを感じた。

ロレッタの脇腹をベオウルフの仕込み杖が貫通していた。そのままベオウルフは手を離し横に逸れ、ロレッタは箒型ドライバごと余剰な推進力の所為で床に叩きつけられた。衝撃で体が跳ね上がり2回バウンドして仰向けに倒れた。ドライバは床を滑り手の届かない場所で金属球に戻り沈黙した。

衝撃で仕込み杖が傷口を滅茶苦茶に広げ出血が止まらない。全身に寒気を感じる。ロレッタは死なない事を願い、そのまま意識を手放した。

呻き声も上げず沈黙した少女を見下ろしながらベオウルフは左頬に痛みを感じていた。すれ違いざまに付けられた烈風による傷跡だと彼は理解している。

興味を持った玩具を見るように彼の目元には信用ならない笑みが刻まれていた。

???????

ジョシユアはベッドの横のパイプ椅子に半ば崩れるようにして座っていた。

目の前には血の気の失せた眠る悪友の姿が。1時間前に適切な処置と輸血を終えたロレッタの容態は安定している。

演習場を飛び出したジョシユアが彼女と別れた通路で見たのは血塗れの彼女を役員に引き渡す、これまた血塗れの男の姿だった。

彼がロレッタの試験官であり件の男性幹部であったとすぐ様理解してその場に立ち竦んだ。男性幹部はジョシユアに気づいた様だが、何も言わず通路を引き返していった。

その後、駆けつけたギルガメッシュの指示により2人は医務室に運ばれ、今に至る。

何気なく視線を落としたジョシユアはロレッタの瞳が緩く開かれるのを見た。椅子から飛び上がりロレッタを覗き込む。

「ロレッタ!?!」

「……知らない天井だ」

「言ってみたかったんでしょ」

「おう」

概ねいつも通りの返答に安堵する。少し活気が無いだけだ。

麻酔がまだ効いているのかロレッタは眠気まなこだ。

「どこまで覚えてる？」

「脇腹抉られて墜落した所まで……」

「本当に何があつたの!？」

「死亡フラグも死ななきや安いんだよ……」

「ああもうこの脳筋が！」

「流石に疲れたけどな……?？」

「だよね!？」

やり取りに疲れたジョシユアは再び椅子に崩れ落ちた。

「そーだそーだ。俺が戦った方は女の人でね、ギルガメツシユさんっていうんだって」

「ほう」

「ロレッタが戦った方はベオウルフさんっていうんだって」

暫くぼうっと天井を見つめていたロレッタが唐突に問いかけた。

「人間か？」

「……わからない。でも人工的なものでは無いと思うんだ」

「私も……そう思う」

「いつだかさ、依頼で次種族の人と手を組んだ時あったじゃん。あの時の作り物みたいな雰囲気は無かったよ」

「お前の直感は……当たるもんな」

考えるのに疲れた様子だ。眉間に皺を寄せて目をきつく閉じている。

「少し寝る。今は……何も考えたく無い。疲れた」

「ん、おやすみ」

そのやり取りから間も無く穏やかな寝息が聞こえ始めた。ジヨシユアもそのまま目を閉じた。

×

数日後、評議会庁舎

「やっぱり、お前がいいな」

ギルガメッシュは大いに機嫌が良かった。得体の知れない悪戯な神に最高幹部として押し上げられてから情性的に日々を過ごして来た身としては、部下が出来るといふ今日は柄にも無く嬉しく感じる。まあ、部下なぞ要らんと候補者を叩きのめしてきたのも事実なのだが。

「選ばれたからにはしつかり働きますよ！ 改めましてジヨシユアといいます。……よろしく願います、ギルガメッシュ様」

好印象を絵に描いたような人間だ。澆刺として、単調だがそれに飽きさせないような気持ちの良い雰囲気を感じ取れる。

秘書課からの推薦もあつての彼だ。何より裏表の無い性格はギルガメッシュの好む物だ。

執務机に肘をつき少年を見上げながらギルガメッシュは頬を緩ませた。

同時刻。

「本日付けで配属となりました。ロレッタと申します」

お手本の様な礼をした少女をベオウルフは何時もの感情を読み取らせない笑みを



浮かべながら見つめた。

無表情ながら無愛想では無く、かと言って従順そうかと言われれば半ば侮蔑を含んだ瞳がそれを否定する。

「秘書課の推薦を全て無視しても……」と思つてたんだが一番最初の名前に君があつただよ。やはり、君しかないね」

「勿体なきお言葉です」

淡々とした私情の含む一切の隙を無くした受け答え。形式上だと言わんばかりのその性格にベオウルフは満足げだ。中々に抜いづらい彼好みの秘書が来た。

何より演習場での他参加者を救出した時の荒々しい口調との大差がこの性格が演じているものと充分に証明する。

いづれ素面を引きずり出してやろう。

最高幹部1性格の悪い男はそう心の中でほくそ笑んだ。

東区??????  
コミュニティービル会議室

もう少しで日付が変わる時間。予め指定された郊外のビルの一室でギンジと秘書

のトキワ、ジョシユアとロレッタが集った。ロレッタが秘密裏に手配したそこは明かりは無く、遠くでネオンが輝いているのがよく見える。

「言い訳ならまだ聞きますよ？」

「わ、悪い悪い悪い！ しまってる！ 首絞まってる!!」

「悪いで済んだら警察はいらねーですよ?」

ギンジの襟首を掴んで締め上げながらロレッタは普段より低い声かつ明瞭に言葉を発音して責め立てた。秘書のトキワは助け舟を一切出さず遠い目をしている。

「よりによつて？ あれとか？ 正気か貴様?」

「本人たつての希望だ……秘書課に手を回すまでも無かつたんだ……！ 正直ホツとした……！」

「せめてギルガメツシュさんが良かったよ!! 何で刺された女と刺した男で組ませるか  
なー!!」

ギリギリと締め上げる音を横目にトキワはポシエツトの中の菓子をジョシユアに分けていた。

「ねえ大丈夫なのあれ、君の上司でしょ?」

「今回はギンにゃんが悪いにゃん。でもギルにゃんと組ませるとなると相性微妙だし仕方のない結果にゃん」

「だよね。俺、あの人の下でやってける自信ない」

「秒で死にそうだにゃん」

「お菓子うめえ」

「空気読めにゃん」

気の済んだロレッタに解放されたギンジは軽く咳き込む。

「……で、アクセス権限レベル4。とは？」

「単純に閲覧出来る情報の量の違いだ」

「え、俺レベル3なんだけど」

「レベル3ならアカデミーの高等職員と同じくらいだ……妙だな、秘書ならレベル3が平均らしいんだが」

「僕も3だにゃん」

トキワとジョシユアはカードを見せる。顔写真と所属が刻印されたカードの隅には「3」の文字が。

「ん？ 私だけ？」

「よほど……気に入られてるにゃん」

「あんな胡散臭さが服着て歩いてるような人に気に入られても嬉しくないのですが」

自分のカードを見ながらロレッタは溜息をついた。昔からそうだ。

「ロレッツタ昔つから妙な男に好かれるよね」

「それが原因で死にかけた事も多々あるからな。今回も……だろうな」

この世に生を受けて僅か16年。関わった男性老年若年関係なくほぼ全てが面倒な性格や趣味や過去を引きずっていたりした。この全てが妙に顔の良い男だから尚更タチが悪い。ジョシユアやナトリはこの中に含まれない数少ない男性だ。

「まあ私の男運の無さは今に始まった事じゃないから置いとくとして。さて、私達は何をしましょうか？」

敢えてこの全員に問いかけるような口調。

「やりたい事は結構ある。聖なる扉については……今は良いでしょう。竜界や神界の調査、最近表立って来たという謎の宗教組織について、各世界代表の素性調べ、聖暦の天才達の搜索及びその研究の調査……ですが」

苦々しい顔で現状を告げる。

「出来ることが圧倒的に少ない。素性調べくらいは造作ないでしょう。しかし聖暦の天才達は痕跡も残していない。難問は竜界と神界。統合された竜界はともかく……神界はまだ上位なる世界にいる。干渉が出来ない上に藪蛇どころか鬼が出る事もありえる」

諦めの表情で最重要事項を告げた。

「何より部外者ってキツイですよ」

皆の意識を統一するべく現状を整理し始める。

「ギンジさんとトキワさん。貴方達は審判に関わりましたが、だからこそ、その地位にいる。特にギンジさんの調査は……勘付かれますね。トキワさんも警戒が必要です。」

で、最難関は私達です。完全なる部外者、場合によっては……処分されますね」

「え、簀巻きでハードモードどんぶらこ?」

「マリアナ海峡あたりの永住権が貰えますね」

「きやーなー」

割りかし本気7割の予想だ。冗談10割に出来ない辺りに今回の難易度が伺える。

内部潜入、調査からの内部崩壊の誘発はロレッタの得意技だが、今回ばかりはその手を封じなければならぬ。下手をすれば死という概念を感じる事なく殺される。

「今回の難易度の把握と……覚悟は出来ましたか?」

「おう」

「出来たにやん。もうやるつきやないにやん」

「振り返らず行くだけだね」

後戻りはもう出来ない。出来なくなるほど、進んでしまった2人とそもそも選択肢に無い2人。

心地よい緊張が4人の間に張り詰めた。

???????

評議会庁舎 カフェテリア

「ぶつちやけやれる事なんてほぼ無いけどな」

「ぶつちやけないでロレッツタさん」

カフェテリアの端でお互い向かい合わせに座り、お互い凄まじい速度で仕事をこなす。全ては調査時間を確保する為に。それなりに騒がしい空間だ。例え評議会の中だとしても直接的な単語さえ用いられなければ目をつけられる事は無い。

「何からやる?」

「敵陣視察」

「ハイリスクローリターンだね?」

「うだうだしてるより適当に突っ込んだ方が発展あると思ってる。任せろ」

「じゃー俺は友好関係築くのに専念しようかな」

「頼んだ」

うまく事が運べば強力な陣営を味方を得られる行動だが、その分予期せぬ陣営が敵

に回るデメリットもある。しかし能力、全体像、根本的な思想等把握出来る事は多い。  
—— どうすつかない。

小型ホログラムディスプレイで資料を開いた。壁に背を向けているから後ろからは覗けない。目の前のジョシユアは自分の分に夢中になっているから気づかない上、透視対策をしているから読めない。

資料には6人の名前と個人情報<sup>が</sup>記されていた。この6人を新たなる天才として招き入れるのがベオウルフの目的だ。

前回の聖暦の天才の”失敗”は、個々に自由にさせてしまった事。その恩恵は大きかったが損失も大きかった。

だからこそ、次種族化<sup>セカンド</sup>。今度は首輪をつけて仕舞えばいい。

ベオウルフの説明ではどの種族との次種族にするか知らされなかった。しかし着任初期にこの様な重大な決定を知らされた時、ロレッタは悟った。

使い捨てられる。

別段にその様な案件は珍しく無い。1人でも十分逃げられる。しかし今回ばかりはジョシユアもいる。

得手をとことん潰されている感覚がある。恐らく向こう側もロレッタの素性を知っている。最悪の場合、チトセやナトリといった裏社会に密接な関わりがある人間と

交友関係がある事も、探偵助手である事も。

そして、指名手配犯のうちの1人と関わりがある事も。

「ロレッタ大丈夫なの？ 今回キツイ？」

ジョシユアの優しい声音に思考に埋没していた意識が跳ね起きた。弾かれた様子を前を見れば不安そうな、それでいて優しい表情があった。

ジョシユアは十二分に理解している。自分が足手纏いになる未来を。

ロレッタは自身の形跡を徹底的に消しているが評議会相手にそれは通用しなかつたと見る。ギンジは不思議に思っていたが、彼女が秘書最有力候補となったのはベオウルフ、もしくは評議会のもっと上がロレッタの経歴を洗い出したからだ。ジョシユアは思っている。

敗北を知らない絶対の勝利者。

利用価値が高すぎる。

だからこそ、？ぎ止める鎖としてジョシユアが利用される。

「……すまん。久々にハードな仕事でな」

「無理しないでよ。愚痴ならいくらでも聞くから」

「……おう」

視線を外して窓の外。透き通らんばかりの夕焼けに反発する様に光を発するビル



の波。

毒々しくて、美しかった。

# 完全なる落日、黄金の夜明け

## 1話 落日

評議会庁舎 最高幹部執務室

「続けてくれ」

「前から行動は確認されていますが、どうも内部分裂があったようで活発化して来ましたが、前任の教祖の行方が知れないそうです」

ジョシユアはプリントを捲りながら報告を続けた。

「内情は大多数が人間、次いで魔物や妖精です。この中にはあらゆる機関のスパイも紛れ込んでいるようで煩雑です。」

「しかし高い地位を竜族が占めていて実態は新興宗教団体の皮を被った恐らく現竜王家に反感を持つ者の集まり、という可能性も」

情報提供及び推察・ロレッタ。出来るだけ大きな山場の情報は統一しようという計

らいだ。恐らく今頃、ギンジやベオウルフにも同様の報告がされているだろう。

「グリモア教団……か。ジヨシユア、お前の考えを聞かせてほしい」

「えーと、そうですね……。昔、別の仕事に就いてた時にチラツと名前を聞きました。その時は特にデカイ組織でも無かったらしいんですが……何で今になって？ とは思ってます」

ギルガメツシユは頷く。

「そうだな。それ程巨大な組織でも無かったのは私も知っている。しかし上層部に竜族の手が入っているのは初耳だな」

「神界関係ですかね。それともほんとうに内部のゴタゴタなのかなあ？」

「……もしくはもつと上の事か」

「へ？」

「いや、何でもない」

言い淀んだ上司に無垢な目を向けて口を割らせる作戦を即座に展開したが何の効果もなかった。妙な引つ掛かりを感じるが、藪蛇沙汰は辞めておこうと自分を納得させた。

「引き続き調査を頼む。脅威になる可能性が高いからな」

「了解です」

「特に所属している竜族の動向は見逃すな。絶対的な規律を外れた奴は何を仕出かすかわからん」

「ガツテンです」

「……そう。何を仕出かすか」

上司の苦々しげな顔に何となく心当たりのあるジョシユア。

「ベオウルフ様ですか」

「私も大分偏見に満ちた意見だが、二つ名からして信用ならん」

「屠竜者、屠竜卿……ヤバいですね」

貴方もだいぶヤバい二つ名持つてますよね、という発言をギリギリで飲み下した。

「こんな事を聞くのはアレだが、お前の友人は死んでないか？」

「死んでません！」

「香典は幾ら出せば良いだろうか……」

「死んでませんってば！ ハツタリと逃げ足ならロレッタ以上の奴を見た事無いです。

本気でヤバくなったら逃げるから大丈夫ですよ」

「なら良かった。……お前も私を取り巻く状況が悪化したら遠慮無く逃げるように」

「……はい」

数分前の会話を思い出しながら酷く長いエスカレーターを下っている。全方位を空やニュースを写すホログラムで囲まれた巨大な中央ロビーは今日も人々で騒がしい。

ギルガメツシユはいつか自分を取り巻く環境が悪化する事を理解している。それは能動的要因なのか受動的要因なのかはジョシユアにはわからない。

あの人も半分神様なんだよな。

半人半神の身の上はさぞ辛かったろう。そしてそれは今も此れからも続くのだろう。何ひとつ欠ける事など無く生きて来たジョシユアに想像出来ない。そしてその人々に関わったジョシユアもいずれば戻れなくなる日が来る。

程なくしてロビーに降り立ったジョシユアが見たのは不機嫌そうな悪友だった。

「ロレッタ。どうしたー?」

声をかけて近寄ると尖った雰囲気を少し和らげた。入り口から歩いて来たに見える。何処からかの帰りだろうか。

「よう」

「めっちゃ不機嫌だけどどうした?」

「世界って闇深いなってな」

「何を今更。……話聞こか?」

「……時間いいか？」

???????

評議会 第27生物進化研究所

遡ること数時間前。ロレッタはベオウルフに連れられて評議会の研究所に来ていた。

「この前伝えた計画なんだが、君にも実際に見てもらいたいと思ってね」

そう言つて差し出されたタブレットに表示された煩雑な文章とグラフ。一際目を引く二重螺旋の資料を見た時、ロレッタの積み上げた経験と知識は嫌が応にも理解した。

「擬似的な神格ですか」

「正解。博識だね」

機嫌の良くなる上司に反比例してロレッタは資料から目を離さないまま、全身の血の気が引くのを感じた。

いつだったか。一度だけ、たった一度だけ目にした二重螺旋構造。

「君も知ってるだろ？ 魔王が妖精王に宣戦布告した事は」

「存じております」

「だいぶ面倒なんだ、神界にはね。だから……手を加えようと思う」

指し示したのは6台の水槽と、薄水色の安定剤飽和水溶液の中に浮かぶ筆型ドライバ。

「直接斬りこめば向こうも気づく。なら、周りを描いて影響させればいい」

未来の操作。歴史における最悪の一手。それが出来ると言うのなら、まさしく、神の御技。

「……なるほど」

平気なフリをしてそう答えるのが精一杯だった。それでも隠し切れない引きつった表情を見てベオウルフは笑みを濃くした。

???????

話を聞き終わったジョシユアは絶句した。

評議会庁舎の展望台の、更にその隅に忘れられたように設置されたベンチに並んで座り、事の顛末を聞いた。

「……………どうすりや良いと思う」

ジョシユアへの問いかけでは無く、自分自身への問いかけだった。

「擬似神格の適合率なんて1桁行くかどうかからしい。最悪、行き着く先は決まってる」

「……………暴走？」

「そうだ。……………考えが纏まらないんだよ」

憎いくらいに晴天の青空を見上げながら話し続けるロレッタ。

「あのな、次種族化した奴ら作るって話は初期から聞かされてたんだ。…………どの種族とかは……………今日、教えられた」

訥々と、淡々と。その声には抑揚は無く、正気も無い。

「私はな、ヒーローでも無いし見ず知らずの妖精や魔物が次種族になつて悲惨な末路を辿ろうが知つたこつちやねえんだよ。…………でもな？ 問題はそこじゃない」

訥々と、淡々と。

「お前みたいな狂氣的な直感はない。けど、此処まで情報が揃つてて良く無い事が起るってわかつてる。…………良くねえ事が起きるってわかつてて、何もしいってアリなのかなつてな」



沈黙。痛々しいくらいに声の無い時間が流れた。吹く風だけが気楽に流れている。悲しいくらいに何も無い時間が過ぎた。

「胸糞悪い話しちまつて悪いな、少し落ち着いた。……話は変わるが。てゆうかこつちが本題だが」

ジョシユアの方を改めて向き直り唐突に服の裾を捲って腹を見せた。

「こいつを見てくれ……どう思う？」

「ぎゃああああああ!!　ここ!　外!　いやいつもの逞しい腹筋だけど!　外!!　人いないけど!　外!!」

「フツ……お前を凌駕する良い筋肉だろう?」

「張り合わないで!　恥じらって!」

良く鍛えられ美しく隆起する腹筋。その上にはこれまでの戦いで出来た古傷が勇ましく縦断していた。

「取り敢えずコレを見ろ」

脇腹を指差す。抉れたような傷の周りに引き摺れたような傷跡があった。

「ケロイド……?」

「何を隠そうベオウルフとの実戦で出来た傷だ」

「脇腹抉られたって言ってたもんね」

「そんなジョシユア君に質問だ。あの人のオリジナルなんだと思う？」

唐突な質問にジョシユアは頭をひねった。大抵、特に好みなどがない限り属性持ちはオリジナルのイメージカラーに寄せる傾向がある。それは属性持ち故の潜在的選民思考の表れであったり、帰属意識から来る安心感を得るためであったりと様々だ。

もしくは髪や目の色でも判断できる場合がある。潜在的な属性に遺伝子が影響されるのが科学的にも証明されている。

「んー？ あの人も全体的に想像できないな……髪と目は緑だし……風？ でも光も捨て難い」

「私も同じ意見だ。なんかファッションも髪の色もコンセプトバラバラで嫌がらせかけてレベルでわからねえ」

「ロレッタもしかしてベオウルフさんの事嫌い？」

「大っ嫌い」

服の裾を直しながら苦い顔を見せるロレッタに思わず笑ってしまう。それでも秘書を勤め上げているあたりに、偏屈だが律儀な性格が見え隠れする。

「さらに質問。あの人、竜族？」

「俺は竜っぽいなあって思うよ。旅をしてた時に何度か会った事あるけど、雰囲気似てる。でも……」

「似てるだけで断言出来ない、か」

「そうそう」

生物の持つ原始的な危機察知能力にも似たジョシユアの直感。今のところ百発百中なのだが複数の種族が混じると精度が落ちる。

「しゃーない保留だ」

「保留でいいの？」

「種族がわかった事で特定種族に対する特攻兵器持つてるわけじゃねーから。そもそも私たちの目的はそうじゃない」

「そだね」

情報収集と動向調査こそが2人の使命。今回に関してはチトセは闇に関わり過ぎた存在であり、彼女が踏み込む事は即ち内部の混乱を招くことになる。これは未だ戻る気配の無いナトリも同様。まだ、まだその段階じゃない。

「それから……今夜あたり踏み込む」

「墓は立てとく」

「骨拾ってくれよ」

「え？ やだ」

???????

チトセ探偵事務所 倉庫

貪欲な知識への渴望。チトセは自壊願望にも近いその気力を見込んで片田舎で燻っていたロレッタに手を差し伸べた。結果として墮ちる未来がある事も伝えられた上で、彼女は未知なる禁忌へと手を伸ばし続ける未来を選んだ。

黒ゴムで髪を括る。愛銃が右のホルスターに収まっている事を確認し、ドライバがジャケツトの内ポケットに位置する事をもう一度触れて確認。グローブを嵌めて軽く握り動作に支障がない事を確認する。一通りの確認が終わって姿見に自分を写した。

何の変哲も無い服装に身を包んだ自分を確認する。

探偵事務所から音も無く抜け出し、路地裏を伝って走り出す。

露呈した時の恐怖はあるが、触れる情報への好奇心が容易くそれを凌駕する。

いつかは危機察知能力も効かなくなっていくの間にか死ぬんだろうな。

地下の配線の間を通り抜ける。四方を圧迫され薄暗く両側面には蜷局を巻く蛇のようのように配管が先へと続いている。何処かで水音がする。地下水道が近いのだ。

ここから更に地下に潜って煩雑な扉をピッキングしつつ潜り抜けると評議会の地

下ボイラー室に至る。

行き詰まる地下通路と比べて格段に空気が澄んでいる。心なしか体も軽い。

ここからはレーダーの展開範囲に踏み込むと即座に個人情報監視モニターに開示される。開示されるので、レーダー適用範囲をひたすら避け、必要ならハッキングもして深部を目指す。シンプルな案だが途轍もない注意力を要する。

やるつきやねえな。

決意新たに、頭上の通気口に飛びついた。

???????

夢だ。これは夢だ。

懐かしい後ろ姿が見える。金色で少し伸びた前髪から覗く痛いくらいに真っ直ぐな目。その手には天秤が刻印された手紙を持っていた。

「待ってるのは破滅のみやで？ あんたはん、それでも進みはるん？」

問いに彼は答えた。

「ああ。それこそが、俺が至るべき場所なんだ」

??

チトセはゆつくりと目を開いた。いつも通りの窓辺のソファで照明を全て落とすたた寝をしていたようだ。夜半過ぎ、開いた窓から吹き込む夜風は冷たい。外のネオンサインで部屋は似合わない色彩に彩られていた。

「体冷やすとロクな夢見いへんなあ」

億劫そうに手を伸ばして窓を閉める。風の音が途絶えて奇妙な沈黙が事務所に降りた。

ナトリが収集した液浸標本の黄色の薔薇が備え付けの棚から此方を見下ろす。うたた寝前に磨いたそれは彼の目の色にそっくりだった。

これでも探偵として広範囲の伝てを持つチトセは評議会入りする前のアーサーと出会い、忠告した。

忠告する事が、自分の役目だと思っただけだ。結果としてどの様な運命に転がろうとチトセの知ったことでは無いが。

ただ、悲しいと思う。

彼がもう少し、ほんの少しだけでも自分を労わっていたら違う結果も出ただろう。

それでも彼は世界の平和という人の身に余る願いを叶える為、あの結果に行き着い

た。

「現世は難儀やなあ……こんがらがった子は、幸せを願いはる事も出来んかえ」

そんな独り言。チトセは感じていた。いつか、自分の「神殺し」としての刃を彼に振り下ろす時が来るのかもしれない。彼の幸せも何かも見殺しにして。

それは少し悲しい事だな、とぼんやりと感じていた。

???????

「詰んだ」

天井裏の配線の隙間で頭を抱えるロレッタ。このままではいつまで経っても目当てに辿り着く事は無さそうに思えてきたのだ。天井裏を移動しつつ、覗く部屋は皆、目ぼしいものは無い。空振りに終わりそうだと落胆した。

立って歩いて両腕を広げられるほど巨大な通気口を移動する。

しばらく歩いて、背後にモーター音が近づいて来ることに気づいた。勢いよく振り返り暗い空間に目を凝らす。今通り過ぎてきた十字に交差してる地点から聞こえて来る。

モーター音が大きくなる。ロレッタは右腕を指揮者の様にゆっくりと掲げる。

モーター音が大きくなる。そして右の通路からファイアトロンが覗いた時、勢いよく手を振り下ろした。

風の刃がファイアトロンの頭部を砕く。破壊音が通気口一杯に広がる。認識モニターを的確に破壊された3台のファイアトロンは一時停止をしたが直後人感センサーに切り替えたようで、顔に当たる部分をグルリとロレッタに向けた。

『第十八階層ニテ侵入者発見、コレヨリ、排除体制ニ移行シマス』

ロレッタは血相を変えて箒型ドライバを起動し脱兎のごとくその場から飛び去った。狭い空間を飛行するのは難儀な上、後ろからはファイアトロンによる火炎放射が迫る。手足を擦りながら紙一重で避けていく。ロレッタのオリジナルは風。いくら自立式のドライバの攻撃とはいえ当たれば確実に致命傷となる。

いきなり排除かよ！ もっと間を空けねえのか!?

増えていく擦過傷に顔を顰め、心の中で悪態を突きながら行き先も解らずただひたすらに飛ぶ。ふと、一つの考えが閃いた。

それほど重要な区域に入り込んだ？

次の瞬間、声が響いた。

「いつちにおいで」

前方下部に見える金網からだ。何処かの部屋か、罨の可能性も？ しかし迷ってる



暇はない。飛行機能を解除し、滑り込みながら金網を蹴り飛ばしてそのまま落下した。紙束の中に落ち、視界の色合いが一気に変わり、混乱する中誰かが庇うように口レツタを覆った。

「はい耐衝撃体制。耳塞いで口開けてー」

即座に言われた通りにすると一拍置いて至近距離で花火が爆発したような腹に響く衝撃が来た。

「ん。オツケー」

低い体温が離れる。恐る恐る顔を上げると学生服と軍服の間のような服を身にまとった背丈の低い少年だった。笑みを絶やさず、満月のような黄色い目がクリクリと動く。右手に宿したファイアトロンを撃退した水は次の瞬間霧散した。

「キミすごいねー！ ガチャガチャに改造したファイアトロンの追撃全部避けれてたね！ えらいえらい！」

そう言つて無邪気に口レツタの頭を撫でる。

「でもねーアレ自爆機能付けてたからね、あと3秒くらいでドカンだったからね、呼んだんだ。流石に屠竜者君の部下死なせたら怒られるもんね」

彼の言葉も思考の端で聞き流し、何故だか妙な既視感に襲われていた。

お世辞にも整頓されると言えない実験室のような一室。散らばる書類に湯気を

立てるフラスコ。ホルマリン漬けの何かが至る所に置いてある。薬品の匂いが薄つすらと部屋全体に広がっているようだった。

生物化学の権威で、六聖人の一人、死刑執行人学園の卒業生……確かオリジナルは水……

「……ヨハン様？」

「ん？ あ、初対面だっけ？ 正解正解。よくわかったねーご褒美にアメあげるよー」

「飴ってそんなジユワジユワいいませんよね。なんかパッケージ突き破って黒煙出てません？ 謹んでお断りします」

「ちえー、データ取れると思ったのにー」

残念そうに瘴気を纏う飴とメモ用紙を何処かに放るヨハン。紙一重で命の危機を回避し先ほどまでの追走劇の終焉以上に安心する。服を引きずりながら道中薬品を手に取り、作業台に置いた。

「あの、助けてくださり有難うございます。ここはヨハン様の研究所……なのでしょうか？」

「お礼なんていいよ。そそ、一番よく使ってるトコ。……あ！ そうだ！」

急に大声を出してその小柄な体から想像できないような速度で未だ起き上がらずにいるロレッタに迫った。ぬらりとした目玉に至近距離で見下ろされ、思わず後ずさ

る。

「ドライブ見せてよ！ 飛行能力付きつて珍しいし、なんなら戦闘サンプルも取りたい！」

「……いい、いいですけど」

×××

常界 名もなき森

「これで治療は終わりな。だが何かしら異常があつたら隠さず言えよ」

「はい。ありがとう、ナトリ先生」

常界の森にあるログハウスで、1人の男が少女を診察し終えたところだった。よれた白衣を身に纏った枯梗色の目と髪 of 男性だ。

何を隠そうチトセの長年の相棒にして悪友、探偵事務所の主治医ナトリである。包帯を手にして少女の頭部の傷を隠す様に巻き始めた。

「毎度言うが礼はいらねーからな？」

「本当にいいの？」

「くどい。別の場所から分捕ってるからいいんだよ……それになフィンセント、最初に言つたろ？ お前みたいな奴ら診るのが仕事なんだよ」

フィンセントと呼ばれた妖精の少女は目を伏せた。

「お前らみたいな奴ら」。天界において特出した才能を持ち、その才能ゆえに天界を加護する存在への介入が予測される者達の強制排除。

都合の良い犠牲。詳細は後に語るが、身内に行き先を偽つてでもこの犠牲者達を治療をする密約を今は亡きとある王と交わしている。

特にフィンセントは最近の犠牲だ。過去に翼を挽がれた妖精達もいるが、フィンセントは特に酷い。

—— 執行者がドジを踏んだとしか思えねえな。

片翼の半壊に頭部の側面の陥没。弾丸が頭蓋骨を抉つたのだ。脳を貫かなかつた事が不幸中の幸いだとも言える。その余波か耳の上半分が消滅。これら全ての傷は左半身に偏っている。

予測されるのは、処罰執行の失敗。想像するだけでも恐ろしい。

「……すまねえな。結局、翼の片方は……」

「いいの、大丈夫。……もう、空を飛ぶ事なんて無いから」

左背面を摩る手は少し震えていた。

「……愚痴ぐらいなら聞くぞ。何回でも言うが異常があつたらすぐ、だからな？  
……………おっと？」

呼び鈴が鳴った。ナトリとフィンセントは同時に玄関の方を振り向く。

「誰だろう」

「勝手に片付けてるから行ってこいよ」

「うん」

フィンセントは玄関へ向かつて行つた。ナトリは治療道具の片付けをしながら密かに聞き耳を立てる。玄関が開く音と、話し声が微かに聞こえて来た。

男1人……………評議会？ 土地の調査か？ 聖なる扉が現れてからやつてる  
とか聞くもんな……………いや、その場合は複数人か？

暫くしてフィンセントは封筒を片手に戻つて来た。

「土地の調査か？」

「あ……………うん。異常はないかつて。紅茶、淹れるね」

不自然に話題を逸らしてフィンセントは台所に入った。封筒を近くのキャビネットに置いて。

ナトリは素早い動作で身を乗り出しそれに指を触れ、口の中で何かを呟く。言語とも祝詞とも区別のつかない発音。知識ある者がその光景を見れば極東に伝わる妖術、鬼

術の類だとわかる。本来、煩雑な下準備を必要とするこの類の術を触れる事と僅か数節の詠唱のみでナトリはやってのけた。

その手紙の内容を一頻り透視して、目を見開いて窓辺に走り、窓ガラスに片手を突き出した。

「……………ッ」

風景音にカテゴライズされるような言語を紡ぎ、掌にナトリのオリジナルである暗闇の力を注ぐ。窓ガラスが奇妙に揺らぎ、その力がナトリの瞳と共鳴し次の瞬間力の波が放射状に森に解き放たれた。

風を追い抜かし、木々を超え、小川を超え、営みを紡ぐ生物すら乗り越える。今やナトリの視界は森を駆け抜けていた。多方面に放出された人間の視界の限界を超えた技を行使しているというのに彼は眉ひとつ動かさない。

そして見つけた強烈な気配。追い縋ろうとした直後、衝撃と共に視界が元に戻った。

「……………はっ」

額に汗をかきながらも元来の冷静さが起こった出来事を理解した。

「弾かれた、だと？」

防衛機構では無く、近づく妖術の範囲に気づき、気迫のみで弾いた。少なくともそ

の様な荒技が出来る人間はチトセくらいいしか思い浮かばない。だが、人間以外なら……  
「ナトリ先生？」

振り向くとフィンセントはマグカップを両手に持ち、不思議そうな顔でナトリを見ていた。

「すまねえ、急用を思い出した！」

纏めていた荷物を取りその場から駆け出す。啞然とするフィンセントを置き去りにナトリはログハウスを飛び出した。

森の中を走りながらナトリは考えを纏めていた。弾かれた索敵術、強烈な違和感、狂気の沙汰としか言いようの無い手紙の内容。

あいつならこの件に関わっている。

俺の知らねえ場面でトンデモねえ事件に首突っ込みやがったな。

呪詛返しなぞそう簡単に出来る訳でもない。そもそも同じ様な物は人にしか出来ない。  
ない。

ならばなぜ、人と竜の間の子のような気配がした？

???????

評議会 第3訓練場

「やっほー！」

「……」

「どうしたの？」

「管理棟仕事しやがれって思っていました」

訓練場の事務所から書類を輸送する途中、これまた生きている事自体が楽しくて仕方がなさそうな半人半竜と出会った。足の鉤爪で天井を器用に掴み蝙蝠のようによろ下がつてロレッタに手を振っていた。

「識別名ジョーイ」

「なーに？」

「戻った方がよろしいのでは？」

「ダイジョーブ、いっつもだから！」

「管理棟仕事しやがれ……」

少なくとも機密事項に当たる生命体の行動を半ば黙認している。仕方がない。い



つか痛いしっぺ返しを食らうのは管理人と自分の上司だ。そう思つて進み続ける。ジョーイも天井から降りてきてロレッタについてきた。

「ねーねー君つて最高幹部の秘書なんでしょ?」

「はい」

「竜殺しの?」

「その通りですが」

「やっぱ怖い?」

「特には何も」

「えーほんとー?」

口の減らない竜だ。いや、思考状態が世間一般の普通と違う。首元に見えるコードは生体チップ、腰にいくつか装着している蛍光色の液体が満ちた瓶は抑制剤だろう。薬品特有の鼻をつく匂いが漂ってくる。

「ちよつと待つてこつちこつち」

「え、あの、ちよつ!?!」

ジョーイはロレッタの腕を掴んで脇道に逸れた。抵抗したら爪で引き裂かれると感じ従つたが、器用にもそれは服さえ切らなかつた。抵抗したら爪で引き裂かれると

「はい、資料倉庫でしょ? こつちからの方が近いから」

指差す先に資料倉庫のスライドドアが見えた。

「近いのもあるけど、職員と出くわしそうだったから、でしょう?」

「正解!」

じゃあねー、と手を振って何処かへ去っていく。その後ろ姿に軽く手を振り返してスライドドアのロックを外した。

——珍しく危機感を感じない男だったな。

数少ないその枠にあの愉快そうな童が当て嵌まるかと思うと不思議だが、彼のような存在の寿命はそう長くはない。並び立つ日は永遠に来ないだろう。

数ある棚の中に書類を納め、端末に目を落とす。だいぶ時間に余裕があるので資料を閲覧しようと手を伸ばした。

???????

評議会庁舎

「君どこから来たの?」

リノリウムの通路でジョシユアはその手に抱いたものを撫でていた。何処からと

もなく現れた熊のような犬のような生き物だ。毛並みは良く、首輪にタグをつけているが名前らしきものは一切書かれていない。飼い主探しが難航しそうだと思っていたが、ちようどパタパタと足音と呼び声が聞こえてきた。

「どこいったのー？ あら、やっと見つけたわ！」

「お、ご主人様来たぞ君」

通路の先から現れたのは片手にリードを持った深水色の髪の少女だった。傍目から見ても仕立ての良い服を身に纏い、所作も洗練されていて育ちの良さが伺えた。

「ありがとう、目を離れたらこれを引きちぎっちゃって……ギルガメツシユさんの所の方でしょうか？ 今度お礼をさせていただきますわ」

「いやいや、礼になんて要らないですよ……えつと、あの……」

「ごめんなさい、自己紹介が先よね。私はシャルラ。聖人会議長様の使徒を勤めていますわ」

「俺はジョシユアです。ひとつ質問があるんですけど……あの、そのリードを引きちぎった？」

確かに千切られた跡がある。かなり硬質な素材が編み込まれた代物にも見える。大人が綱引きをしても切れないだろう。

この小柄な生き物が？

「そうですわ。あら、それ以上撫でちゃうと」

「へっ?……あっちい!」

突如、生き物が熱を放ちながら発光し、ジョシユアの腕からすり抜けその光は形を変えながら巨大化していく。光が飛び散ったその場に、全く別の生物がいた。

体毛に埋もれた複数の緑色の目、鋭い牙。現れたのは人の丈の2倍はありそうな異形の狼だった。

「怖がらせてごめんなさいね? 気を許してしまうとつい戻っちゃうの」

申し訳なさそうに言うシヤルラ。しかし相手は各地のトンデモ生物を見、そして触れ合ってきた冒険家である。

「か」

「か?」

「かっこいい!! 召喚獣!? 召喚獣なの!? 体格可変とかレア過ぎるすげえ! 久

しぶりに見た!! 毛並みサラッサラッ!」

「……! そうでしようそうでしよう! 身嗜みには気を使つてますわ、共に戦う仲間ですもの!」

一瞬にして意気投合。両人に褒められ異形の狼も満足気だ。

「触っても平気？」

「全然平気ですわ」

恐る恐る顎を撫でる。気に入ったのか、喉を鳴らして目を細め、緩く尻尾を振っている。

評議会に入ってよかった。本気でそう思ったひと時であった。

ちなみに同時刻、悪友は頭を抱えている。

×××

### 評議会庁舎

夕方。ロレッタは訓練施設から帰還し、六聖人に配布する資料を届けて回っていた。無聖人ニコラスは外出中のため使徒に預け、光聖人ジャンヌと闇聖人シオンと風聖人イージスは本人に手渡せた。ヨハンは執務室に見えなかったので地下研究室（ほぼ自室）に押しかけて渡した。

なんの奇縁かアクセス許可が下りていたのは気にしないている。

過去最高レベルでよくわからねえ男と知り合っちゃまった……。



「使徒だったんです。あ、今度の資料？ 受け取っとくよ」

唾然としたままのロレッタから資料を受け取り中身を見聞するフォルテ。間近で見てもやっぱり本人だ。そして顔が良い。とても顔が良い。

「あ、それとファンの皆にはナイショね？ 俺と約束……して？」

声を潜めて片目を瞑ってみせる。ロレッタは全力で頷くしか出来なかった。

??

「顔のいい男は最高だな」

知性のへったくれも無い感想を小声で言いながら確かな満足感を持って歩を進めるロレッタ。

「失礼します。……ベオウルフ様？」

返事も気配もないのでそのまま執務室に踏み込めば、案の定、主人は留守だった。

「どこ行つたんだあの男は……」

机の上には書類が幾つか積まれている。整理しようとして手を伸ばした時、一番下の引き出しが僅かに空いているのに気づいた。好奇心につられて引き開けると、書類を覆い尽くす様に無数の使用済み注射器とパッケージが入っていた。奥の方には未開封で液

体が充填されている物も。

乱雑に、そしてかなりの数だ。ここ数日で使用したとは思えない。使用済みの物は目分量で20は軽くある様に見えた。パッケージと使用済み注射器を拾い上げ、懐に収める。次の瞬間扉が開かれた。

「ああ、君か」

「お帰りなさいませオウルフ様。六聖人への資料、全て配り終えました」

扉が開く一瞬前に姿勢を正し足で引き出しを閉め書類整理のフリをしたロレッタはあつさりと言つてみせた。その動作に不自然さは一切無く、さも忠実な秘書であるようにいけしやあしやあと帰還した主人に一礼した。

「ニコラス様はご不在でしたので使徒ドロツセル様にお預けしました」

「それ以外は全員配り終えたか。あの水聖人にも？」

「少々の荒技を使わせてもらいまして本人に渡せました。ついでに縛り上げて使徒ワトソン様に納品……引き渡してきました」

「今納品つて言つた？」

「気のせいでしょう。妖怪の類じゃないんですかね。良い祓い屋がいるのでご入用ならご紹介します」

並大抵の人間が行使すれば精神が発狂しかねない様な呪術の類を湯水の如く使え



るナトリなら陰陽師の真似事くらい出来るだろう。医者というより寧ろそっちが本職の様にも思える。

そんなロレッタの心境を知らないでベオウルフは微笑んだ。

「外部委員会への資料の添削分は？」

「外交課と擦り合わせをして修正済み、明日にでも届けられます」

「天界と魔界の状況は？」

「緊張状態が続いています。どちらも敵対種族の入国を禁止しているようで界境地帯は嚴重な監視が引かれています」

「無才と水才の搜索状況は？」

「かなりの数の調査員を出している様ですがこれと言ってまだ。どうやら水才の方はグリモア教団の方で間違い無いようです」

「自立竜型ドライバの調整の進捗は」

「最終工程完了、起動実験終了。いつでも使える様です。報告書がこちらになります」  
「……素晴らしい把握能力だね」

「出来ることしか出来ません」

機嫌が良さそうに頷くベオウルフは報告書と入れ違いに一枚の書類を手渡した。場所と日付と時間が書かれたメモとも取れる書類であったが、1番端に生物進化研究所

の刻印が禍々しく押されていた。

「例の件だが、明後日になった」

「全員の返答は……了承ですか」

「ああ、その件で君にも立ち会ってほしいと思ってね。知る事は好きだろうか？」

「はい」

「当日は第27生物進化研究所に直接集合してくれ」

「了解しました」

本日分の業務終了を言い渡され、再びベオウルフに一礼してロレッタは部屋を出た。廊下を颯爽と歩きながらタッチパネル式通信端末を取り出す。

TO: ジョシユア

明後日死ぬ気で開けとけ

たったそれだけの文章を打ち込み送信した。

???????

ロレッタにとってある意味運命のような時が現在進行形で行われている。

眼下に見下ろす無菌室には6台のベットとそこに横たわり夥しい本数のチューブ

に繋がれた6人の男女。床には古典的な魔術式が刻印され、アンバランスな空気を漂わせた。

施術が行われ始めてから早3時間ほど経っている。

研究員と話していたベオウルフがロレッタに声をかけた。

「擬似的な神格が出来始めたようだ。ほぼ成功だよ」

「そうですか」

「下の部屋に行くことも可能だ。俺は暫くドライバの方で調整があるんだが……君はどうする？」

「ご入用なら、お申し付けください」

「ああ解った。好きにしておいて良いよ」

制御室を出て行くベオウルフ。ロレッタは近くの研究員に声をかけ、入室許可をもらった。除菌室の扉をくぐり、除菌シャワーと紫外線を浴びて施術室に踏み込む。

人間が立てる音のしない白い部屋。機械音だけが響き渡る。ベットに近づき、チューブを引っかけないようにゆっくり歩いた。

薬品投与により自発呼吸もできない程の昏睡状態の妖精と魔物を何の感慨もなく見下ろしていた。彼らの呼吸を繋ぎ止める酸素マスクの音が等間隔にシュー、シュー、と響いている。

この場でチューブ全部叩き斬って、上の階の研究員全員ぶち殺したら歴史くらい変わってくれっかな。

そつとジャケットの背中に仕込んだアーミーナイフに手を伸ばした。触れる柄はプラスチック製なのに酷く冷たく硬質に感じる。

馬鹿げた妄想はロレッタの頑張り次第で出来てしまうかもしれない、非現実的だが現実になる要素をふんだんに含んだ物だ。だがそんな物騒な事を仕出かす訳でもなく、彼女はナイフから手を離れた。

ロレッタは正義の味方ではない。

だからと言って悪でもない。

何方の素質もありながら、何方にも成れそうに無い、只の多才なだけの少女だ。

世界を救うなんて大それたことも出来るはずがない。出来ることしか出来ない。

だからせめて、退路を断とうと思ったのだ。

この妖精と魔物たちの未来を見捨てる事で。

英雄の真似事をするには、頭の悪い彼女はそれしか思いつかなかった。

いや、思いつかない様にした。

「すまねえな、聖曆の画伯」

外の誰にも聞こえない様な呟き。色の無い無菌室の高い天井を見上げて、ロレッタは深い溜息を吐いた。

×

施術が完了したのは真夜中になってからだ。とりあえずの解散で上司とはそこで別れた。

駐車場の愛車に乗り込んだ直後、助手席側のドアが開き白衣姿のジョシユアが颯爽と乗り込んで来る。

「どう？ 完璧だったでしょ？」

「無菌室への入室許可くれたのお前だろ」

「正解！」

片手に持っている髪を振り回しながら満面の笑みのジョシユア。ロレッタがエンジンがかかるのと同時に白衣を脱ぎ捨て変装に使っていたもの全てを後部座席に放り

込んだ。

駐車場を一巡して、車は林道に滑り出た。

落葉樹の列に見下ろされながら下ると不意に視界が開け高速道路に合流した。E  
TCを通り抜けて車は中心街へ向かう。深夜という事もあつてか、走行する車は極端に  
少なかった。

「ねえねえ何なのアレ。あんなに気持ち悪いほどの作り物感始めてだよ」

「あれが神様なんだよ」

「神様つてあんなに気持ち悪いものなの?」

「さあな」

そう言いながら片手でバインダーを手渡した。経年劣化で側面は崩れている。

「訓練場の倉庫で埃被つててな。……神格の複製実験の論文だ」

ファイルの中には所々磨耗した論文が2冊、綴じられていた。

type 000 Code: gryps

type 264 Code: greif

「神とのセカンドを作ろうとした種族人口複合実験の論文だ。草案にして失敗作のグ  
リュプスと、最終実験にして成功体のグライフ」

「グリュプス!!? あの人プロトタイプなの!?!」

「あの駆使ってんなら良く知ってるよな」

「本人がセカンドって言うてたけど……一番始めのだった何て知らなかった」

竜王に保護された一族、通称ノアの一族によって運営される世界を繋ぐ夢幻駅。それらとは同一にして他なる駅がある。

無限駅コーカサス。複合獣の彼はその管理者で、ジョシユアと深い関わりがある。

「始まりは10年前、ある神が常界の山中で惨殺死体となって発見された。神格は回収され……始まりの次種族研究に繋がる」

語り始めるロレッタ。暗闇に沈んだ車内に走行音と彼女の声だけが低く響く。

「神格の植え付けの実験さ。草案グリユプスの失敗を皮切りに200を優に超える失敗の果て、第264回神格複合実験でようやくグライフが生まれた」

ハンドルを握ってただ真っ直ぐに前を見つめるロレッタ。

「そのグライフとやらも植え付けられた神格が謎の暴走を起こして1年ほど昏睡状態だったらしい。死の淵から生還した彼は神格が定着した完全体として次種族研究の成功の象徴になったってさ」

「……神格を神様の死体から剥ぎ取った?」

「やりそうな事だ。……もうひとつ、勝手な推測だけだな」

そう前置きして。

「チトさんが関わってる気がする」

「神殺し、だから？」

「ああ。私らがチトさんにスカウトされたのはほんの2年前くらいだろ？ それ以前に何をしてたかはサツパリだ」

「謎多いよね。……でも神殺しなんて物騒な字名が付くくらいには……殺る事殺ったんだらうね」

前方の夜天が不自然に明るい。この先に中心街がある事を示す文明の光だ。

「あと30分で中心街だ。どうする？ 私は庁舎に戻るが」

「あ、事務所で降ろして！ チトさんに報告しとく」

「頼む。そうだよな、いざとなったら……それこそ神殺しが必要になるよな」

ロレッタのその皮肉に僅かな後悔と憐憫が含まれている事を感じ取りジョシユアは黙った。

だいぶ前に今回の件を打ち明けた時もそうだった。強欲で人を人とも思わず世界が滅ぶ事さえやむを得ないなら受け入れる彼女は、その実、律儀でほんの少しだけ弱虫で、月並みな言葉だが優しい少女だ。

ジョシユアは見ていた。無菌室で彼女が溜息を吐きながら、悲しそうな顔をしてい



たのを。

ツライなら、逃げれば良かったのに。

そんな思いは胸に秘め、まだ遠くに見える中心街の極彩色を見つめた。沈黙に耐えかねたのかロレッタがラジオを入れる。音量大きめのジャズが気怠く流れた。

??????

タッチパネルにスペアキーを認証させてスライドドアを開く。眼前に広がる光景は最早お馴染みかもしれない。

「勝手に失礼するぞ」

「あ、ロレッタだ。上手くいった？」

「成功だ」

聖人相手に暖気もせず話しかけるロレッタを、振り返りもせずフラスコから別のフラスコに毒々しい色合いの液体を注ぐヨハン。彼女はその後ろにそつと忍び寄り咳払いをした。片手には妙に写実的なミジンコの絵が描かれた紙袋が。

「ヨハンさん。これを」

「ん？ あー！ ミジンコ食品研究会のやつじゃん。限定クッキーだーよく買えたね？ 貰っていいの？」

「どうぞ。魔界で密かなブームの羊羹もお付けします」

「わーい、ワトソン君と一緒に食べるねー。で、何して欲しいの？」

受け取りながら意地悪そうに笑うヨハン。ロレッタは見様によつては好戦的な無表情のまま、ジャケットの内側から使用済み注射器と血のついたナイフを取り出しヨハンに渡した。それぞれ袋に収められている。

「このナイフに付着した血のオリジナルと種族が知りたい。注射器の方は成分を。出所はこつちで調べる」

「オツケーオツケーそのくらい任せてよ。貰った分は仕事しなきゃねー」  
片手に紙袋、片手に注射器とナイフをぶら下げてニツと笑った。

???????

チトセ探偵事務所

午前中に仕事の打ち合わせを終え、1人細々と書類を作成するチトセ。助手が2人もいないと流石に味気ない景色になる上、細々した連絡作業も1人でやらねばならない為、地味に忙しい。

背にした開いた窓から緩やかな風と人々の喧騒が流れる。1人で、静かな午前。

突如として異音が混ざる。一步一步に怨念をまとわせ地を踏みしめるような盛大な滑走音。ホラー映画の演出のような音がドアの前まで来ると蹴破られ、勢いを殺さぬままチトセに蹴りかかった。

「  
、  
——  
!!!」

詠唱と早業の印を結び人とは思えないほどの力でチトセを蹴破らんとする。反射でチトセは机を踏み台にして取り上げた鞘に収まった刀で受け止める。兩人に踏み荒らされた書類が雪のように舞った。

「荒々しいご帰還やなあナトリ。なんや？ 魔界で女にフラれたん？」

受け止められても脚力を緩めないナトリ。明らかに激昂しているのが見て取れる。

「てんめえ妙な事に足突っ込んだだろ？ ぶっちゃけ世界巻き込むような案件だろ？」

オラ吐けオラア！ ネタは上がってんだぞ！」

「あんたさん酒飲みなはった？ ノリがドラマの尋問下手くそな新米刑事やで？」

「うるせー！ 100パーてめーの所為だコラア！」

一歩も譲らぬ攻防。2人に限界は無くとも2人に踏み台にされている机に限界が来ようとしている。ミシミシと不穏な音を立てているのに気づいたチトセ。舌打ちしてナトリの足を思い切り払った。

音に近い詠唱の後、閃くような回し蹴りをナトリの腹に喰らわせた。空気を打ち付けたような音と共に彼の体は一直線に飛ばされドアを通り過ぎて廊下に叩きつけられた。華麗に机に着地したチトセは刀を何処かに投げ捨て、ちゃんと床に降り立って散らばった書類を拾い始めた

「あんたさんなあ。ウチがアカン事に首突っ込むんは何時もの事やろ？ ほんまにどうしたん？」

何事も無かったようにムクリと起き上がったナトリは頭の埃を払いながら呟いた。

「……観光ついでにヤバめな奴の所行ってな。そいつに届いた評議会からの手紙、好奇心で透視したら……ロレッタの名前が連名であった」

「へえ？」

「あ、これチトセ関わってるって思ってた帰って来た」

「結論早すぎへん？」

「どうなんだよ」

「アタリやで」

チトセは明瞭に最高幹部ギンジに請われ協力関係を結んでいることを説明した。原稿用紙二枚に収まりそうな簡潔な説明にナトリは膝をつく。

「あー……お前って奴は」

「着いて来はるやろ？」

「そりや着いてくさ。半世紀かけたってお前みたいな奴はいねえ。……俺達は良いさ」

チトセを見上げナトリは問いかけた。

「ジョシユアとロレッツタを……これ以上の深みに嵌めるか？ 確かに此処に入る前に覚

悟は聞いたし大分えげつない仕事にも引っ張った。だけどよ……相手は世界だぜ？」

「ナトリ」

一言。静かに発した。

「子供を信じるのが、大人の役目や」

返答に詰まったナトリを見下ろし、チトセは柔らかに微笑んだ。

???????

美しく醜く狂った光景だ。瞳が左右違う色彩に彩られた魔物と妖精達。円卓の場にして講堂にベオウルフの朗々とした低い声がよく響き渡る。語るは来たる聖戦への歪曲の賛美。

投げられた質問には淀みなく明瞭に答えていく彼の姿にロレッタはチトセを重ねていた。

「でもさあ、未来なんてどう描けば良いの？ 僕ら絵描きは常に過去しか描けないんだし」

「未来を生み出すために前を向く必要は無いんだよ。未来は、過去の積み重ねでしか無いのだから……そう、過去が未来を造るんだ」

水の魔物にそう答え。

「世界評議会とは何を目的としているのかね？」

「今も昔も世界の常化だよ」

「それでこの有り様か」

「だから貴方に声をかけたんだ」

闇の妖精にそう答え。

「女王達は、知っているですか」

「知っている、いないの問題じゃ無い。全てを知った上でどう動くかだ」  
無の魔物にそう答えた。

返答を終え、画伯からの質問が無くなった後、ベオウルフはロレッタを振り返った。  
「君から何か意見があるかな？」

発言した方が良いと瞬時に理解し、すでに有事の際はハツタリかまして良しと事務所一同から許可を得ているので遠慮なく発言する。

「確定情報では無いのですが、ひとつ」

全ての視線がこちらに向いたのを確認し、続ける。

「ここ最近、神殺しと見られる女性が目撃されています。主に廃棄区画に残る世界評議会傘下の研究所跡地で相次いで目撃情報が。何よりそれは特殊な術で神格を見抜くとか。……気づいたら首が飛んでいる、などあり得ますのでご注意ください」

以上の事を淡々と言い切った。もちろん全て嘘である。一部（首が飛ぶ等）真実も交えているが全くの嘘である。

「なるほど、此方の動向に気づいたのかな？」

「昔の伝手故に信憑性が低いです。何より滅多に表に出てくる事のないモノ。そういうのが存在している、と認識するだけで良いと思います」

全くの嘘である。頻繁に表に出て来ているのである。

「何より、全てを描き変えられるなら、神殺しなど眼中にないでしょう？」

その問いはベオウルフでは無く、聖暦の画伯達へ。挑戦的にも挑発的にも聞こえる極めて平坦な問い。それはある者にとっては鼓舞で、ある者にとっては忠告で、ある者にとっては確認でしか無かった。

画伯達の纏う気配が明らかに変わる。その言葉こそ、自らが神である証明。神殺しなど障害になろうか。

聖なる未来は、我々の手に。

———  
それでいい。無謀に、無節操に、自分らの万能を信じな。

画伯達の意識をたつた一言で変えたロレッタに満足そうに笑み、ベオウルフは全ての始まりを宣言した。

「役者は揃った。彼らが存分に暴れられる舞台を、描き出そう」

×××

しばらくその場に止まった後、会話の区切りのいいところでさも今来たとばかりに角を曲がって姿を現した。

「レディさん次の打ち合わせの資料……あ、すみません出直します」



ジョシユアはそう声を掛け、状況を確認して引き返そうとするフリをする。  
「受け取ろう。気にするな、同僚だ」

礼儀正しく受け取ったレデイに一礼、そして彼女と話していた女性にも一礼する。  
眼鏡を掛けた短髪の妙齢の女性だ。

その場を去ったジョシユアはボイスレコーダーをオフにした。

??

ロレッタはボイスレコーダーに繋いだイヤホンを耳から外し、ジョシユアに押し返した。お互い殆どの業務を終えた夜9時。滅多に人の来ない自販機コーナーのイートインで待ち合わせをした。

「……ヤバイな」

「だいぶヤバイよね」

内容は先ほどの常界代表レデイと聖王代理ミレンの会話だ。ここ数日、円卓の騎士が何やら行動をしていると聞き頻繁に本部職員と関わるジョシユアは常時ボイスレコーダーのスイッチを入れ仕事をしていた。

そして遂に「鞆」奪還に向けて円卓の騎士が行動する事が判明したのだ。そしてそ

れが、渦中のグリモア教団が所有していることも同時に判明。円卓の騎士はほぼ独断で動いているにも関わらず、上層部は放任のままだ。

「もはや円卓の騎士には期待をしていない？ いや……違う。彼らは元を正せばアーサーに使える私設部隊、評議会の戦力としてはカウントされていないから放任されている……？」 いやアレだけの一大勢力放任とかはバカか

「円卓の騎士の立ち位置がわからんが……鞘か……」

「鞘つてあれ？ 運命／夜に留まるのアレ？ 作中屈指のチートアイテムのアレ？ 円

卓確定聖遺物？」

「概ねあつてる。円卓どころかアーサー確定のアレだ」

ノベルゲームを引き合いに出すジョシユア。ロレッタは頷く。

「こちらは聖剣カリブルヌスより文献が少ないからあんまり信憑性が無いが……無いんだけどなあ……」

「ゲーム的に言えばこう、不老とか？」

「いや、そんな直接的じゃねえよ。ただ単に傷の治りが死ぬほど速くなるだけ。格好良く言うなら万物を再生……みたいなの？」

「それ普通に凄くね？」

円卓の騎士がそれを求めているとして。やはり、徹頭徹尾に聖王奪還を目指してい

ると見える。目標がブレない勢力は良い。監視と推測が楽だ。

しかし常識を超えた治癒効果のある鞘を求めるといふ事は、聖王に重篤なダメージがあると思定していいのだろうか。

「……ジョシユア、お前はこの件から身を引け」

「へ？」

「もつと違う所で出しゃばって貰う。今回は先生が特攻すると思うからな」

「帰って来てるよね。あ、まさか教団にお知り合いが……？」

「長い付き合いの患者が居るんだと」

「塵も残らないね……南無三」

ナトリの戦い振りを思い出してジョシユアは本気7割の合掌する。暫く他愛の無い会話を交わした後、ロレッタは立ち上がった。

「出来れば神殺しについて調べてくれないか？ 暫くは手を回せそうに無い。……あの人は謎が多すぎる」

「ん。オツケイ任せて」

??

ロレッタに両親はいない。保護者はいれど、実の親はとつくに死んでいる。

人と比べてそれなりに寂しい季節を送ったが、別に人付き合いが無かった訳ではない。

とりわけ付き合いが長かったのはミドリとエレナ。

仲のいい2人を見ているのが楽しかった。

中学の頃、保護者の勧めでチトセに初めて出会った。

当時、裏で麻薬密売に手を染めていた会社を内部混乱、解体、代表取締役の銃殺まで成し遂げてしまった彼女の心意気を良しとし、チトセにスカウトされた。

スカウトされてからは地元を離れて中心街の中学校に通った為、2人がどうなったかは知らない。

ミドリが泣きじやくりながら電話をかけて来たのは夏祭りの頃だった。

エレナが、行方不明になった。

報せを聞いたロレッタは急遽地元へ舞い戻ったが、既にミドリはエレナを探して飛び出した後だった。共通の友人に聞けば、エレナが行方不明になる直前にミドリと喧嘩したらしい。

元より神を祀る山がある地区であった為、エレナの一件は「神隠し」「連れていかれたんだ」と囁かれ、現在に至る。昔からやたら行方不明事件が多い。

エレナもその一人となっただけなのだった。

落胆して中心街へ帰還したロレッタに届けられたのはミドリの手紙。エレナを探しに行く旨が書かれており、直ぐに連絡を取ろうとしたがアドレスは着信拒否された後だった。

間の悪さを本気で呪った。

最後にミドリから連絡があつたのは聖なる扉が開かれたと報道された後だった。

忘れもしないアドレスからただ一文「エレナが見つかった」といつも通りの一方的な文面で終わった。

その直後、ミドリが指名手配犯の一人になった。

一方的な所は3人の共通項であり今に限った事じゃない。ロレッタ自身も身に覚えがあり過ぎる位に一方的だった。

それが許されたのはただ単純に付き合いが長かったからという事。便りが無いことが元気な報せなど軽口を叩き会っていたあの頃が懐かしい。

かといって2人の行方が気になっても妥協するほどロレッタは諦めが良く無い。

「……………」

広大な資料室を覗き誰もいない事を確かめ入室した。一番奥の検索機に向き合うと電源を入れ、アクセスカードを画面に翳す。セキュリティアランスは十分に足り

ている。キーボードに手を触れた。

あの日の2人に何があったのか、断片だけでも知りたかった。

???????

クロードは気配を感じて後ろを振り返る。通り過ぎた通路の真ん中に片耳を包帯で覆ったフィンセントが居た。

神をこの身に宿してからどうも気配に敏感になった。

特に殺気など、普通ならば訓練を重ねなければ気づかないような気配の流れを強く感じるようになった。対するフィンセントからはその様な暗い感情はなく、ただ単に話し相手を探して居たような身振りだった。

「どうしたのかしら」

「……資料室に行こうと思って。ねえ、序でに1つ聞いて良い？ ベオウルフさんの秘書、どう思う？」

そんな事を尋ねた。並んで歩きながらクロードは考える。静かな浅藍色の目をした人間の少女。口数少ないが、所作や仕事の速さから確かな実力者と感じられる。

何より秘書試験でベオウルフと一級品の戦いを演じたのは評議会の語り草だ。

「そうねえ……強そうな女の子、かしらね。でももっと深い場所では違うんでしょね」  
「違う?」

「静かな人だけでも勝ち続けてきたプライドみたいな物を感じる……なんて言えば良いのかしら?」

実際の所、関わりが少ないためクロードは断言できない。

「ねえ、どうしてそんな事を聞いたのかした? ロレッタさんと何かあった?」

「違う。……さつきロレッタさんと誰かが話してるのを聞いてね。……神殺しって言葉が出て来た」

その言葉に思わず歩みを止めかけたが、何でもない様に歩き出した。フィンセント自身もその言葉に恐怖を持っているわけでもなく、淡々とした態度だった。

「怖い?」

「そんな訳ない。でもそれほど神殺しに拘るのになって」

「拘り……そうね。あの人、そういう話集めるのが仕事なんじゃない? そうでなきゃベオウルフさんの秘書なんて務まらないわ」

「それもそうね……考え過ぎた」

そうこうしている間に資料室に着いた。入れ違いに退出して来たレオナルドと出くわした。

「あら、貴方も来ていたの」

「……用があつたからな」

無愛想にそう言つて2人の横をすり抜けて何処かへと去つていく。

「珍しいわね。大抵の事なら自分の手持ちで済みそうなのに」

「それほど重要な事調べてたんじゃ無いの?」

2人はそんなことを言いながら資料室に入つていった。

???????

夜も浅い時間。ナトリは1人、中心街から遠くの埠頭を彷徨い歩いていた。山積みになつたコンテナと整列するクレーンに見下ろされ、強い海風に身体を押された。

そんな彼に懐かしい人物が現れた。

「ナトリ先生ー!」

「フェリス! お前デカくなつ……本当にデカくなつたな!」

思い切り抱きついてきたフェリスの頭をめちやくちやに撫でる。見ないうちに随分と背が伸び、大人びてきた。

「よお、ナトリ先生」



「ローガンか。今日は古馴染みによく会うなあ」

ローガンはサングラスを外し一礼する。ナトリも抱きつかれたまま一礼した。

フェリスに頼み込み、ローガンと2人きりになる。埠頭近くの公園へ走っていく少女の後ろ姿が見えなくなる頃、お互い並んでベンチに腰掛け、ナトリは口を開いた。

「あれから何年だ？」

「7年くらい、だったかな」

「そりゃフェリスがデカくなる訳だ。俺も年取ったな」

7年前、3人は空港爆破テロの現場で出会った。ローガンは傭兵として、ナトリは救急救命士として、フェリスは……被害者として。まだ新米でトリアージタグを右往左往しながら筆り取っていたナトリの元にフェリスを抱えたローガンが駆け寄り手当を頼んだのが最初だ。

時は経ちナトリは闇医者に、フェリスとローガンは円卓の騎士として活動し、今はテロ現場で会ったりしながら細々と交流が続いている。

「息災か？ ヤズミ店長がこの辺にいて言ってる」

「最近はこのち方面で仕事してんだ。ヤズミの店の近くのウィークリー借りてんの」

「結構近くじゃねーの。今度酒持っていくか？ 一杯やろうぜ」

「いいなあそれ。ビールとソーセージは最高だ」

遠く対岸の工場を見ながら惰性に任せて駄弁る。ふと、会話が途切れる。お互いに話すネタが尽きたのだ。

「近々、デカイ仕事があんだよ」

「上司絡みか」

「おう」

報道もされている上、チトセから詳細を聞いているナトリは局面が動くのを感じた。だからこの正直で優しい男が迷わぬように一言だけお節介を。

「ま、こんな悪徳医者が言っても説得力無いと思うがよ。今は道を進みな、それが、いつか願ったイマに続くから」

雪原のような閉鎖した静音が降りる。

「何があっても振り返るなよ」

フェリスに宜しくな、と言ってナトリはその場を立ち去った。ローガンは白衣が夜景に溶けるまで、その背を見送った。

???????

エレナが行方不明になった後のミドリの足取りがわかった。

評議会のデータベースにある限りでは、吹く風の名に恥じず色々な場所を巡っていたらしい。

しかしその足取りはある時不自然に途絶えている。記録が更新されなくなったのは最高幹部ギンジ達が扉に到達した時期。

恐らく、何処かに匿われてるのか。

次にエレナ。彼女はいつの間にやら最高幹部オズ一派の一員となり、ドロシーと名を改めて行動していた。

こちらにも、ミドリと同じ時期に更新がされなくなっている。最終的に確認されたのはミドリと同じ場所。恐らく再開出来たのだと信じたい。

昔つから突飛な事しかしねえな本当にコイツは……。

ミドリも大概だがエレナの方も予測が付かない。まあ生きてるだろう。恐らくは。何の因果かお互いに最高幹部の部下となつていようとは。

本当にわからないものだ。と溜息を吐いた時、ふと後ろを振り向いた。

「……誰かいます？」

返事はない。ただ空調の音がするだけだ。何かの気配を感じたのだが、気の所為か。

「とうとうボケたか……」

第6感の衰えに落胆しながらパソコンの電源を落とし、資料室から立ち去った。

人間の気配が完全に消え、空調の緩い音がしばらく響いた後、書架の陰からキャスケット帽を目深に被った男が現れた。

レオナルドは先程までロレッタが使用していた機器を立ち上げ、履歴を引き出した。一般利用のアクセス権限では閲覧出来ない情報故に、履歴の大半は空欄になっていた。

USBメモリを差し込み、何も刻印されていないカードをディスプレイに翳す。

『マスターキー認証』

一拍置いた後、空欄が埋まる。キーボードを慣れた手つきで操作し、履歴と内容をコピーした。電源を落としUSBメモリとマスターキーを懐に納めて退出しようとした時、クロードとフィンセントに行くわした。

「あら、貴方も来ていたの?」

「……用があつたからな」

2人の脇をすり抜け通路を進んで行った。

???????

中心街北区 アパート

銃型ドライバの手入れをしていたジョシユアは顔を上げた。時刻は日付が変わって少し経つ頃。端末に着信が入った。油に塗れた布巾を置き、確認するとロレッタからだった。

この時間に悪友からのメールとなると無意識に覚悟してしまう。意を決して薄目でメールを開いた。

『緊急』

グリモア教団本部座標X

先生

伝えて

円卓作戦展開

急いで』

「マジかー！」

怪文書に等しいメールを件の円卓の聖鞘奪還作戦が始まったと解説し、焦る。ナトリの知人がいるなら作戦展開中にも乗り込まねば間に合わない。

急いでメールフォームを開きナトリに向けて今の内容を転送した。数秒後に『了

解』と一言だけタイトルもなく返信された。

「ミツシヨン完了……あいつ今何やってんだ？」

その作戦展開が知れるのなら、会議室にでも張り込んでたのだろうか。執念の塊のような彼女ならそれくらいやりそうだが。

真実が気になるので『今どこ?』と送信した。少し経った後、彼女からの返信があった。

『現場に急行中』

「……マジ？」

???????

### 評議会 第3訓練場

時間は少し遡る。

ベオウルフの後を歩きながらロレッタは内心冷や汗をかいていた。リノリウムの通路に反響する2人分の足音が不気味を煽る。

何より通路の片面には、等間隔で鉄格子の扉が並んでいる。そこから覗く人ならざ

る気配。彼らは特務竜と呼ばれている。

「……ところで、君の友人が行方不明だね」

唐突にそう切り出され現実に引き戻された。表情は何もない。寧ろ伺いたくない。「君の同郷のミドリ、だったかな？ 去年の夏から姿を消して……最後に確認されたのは3ヶ月前。以来、連絡は取れていない」

指名手配犯と関わっているからテーマが被験体になるんだよ！ とかありえそうで怖いな……。

場所が場所だ。ここは生物進化研究所と連携している。前後不覚になって気付いた時には被験体その1という事態が候補から下げられない。

「……それが、どうしたのでしょうか？」

「彼女は黄昏の審判後、竜界に匿われたようだね」

音も立てず背中の中のホルスターに手を回す。戦犯の関係者という事で処断されるか？ いざとなったら……いざとなったら？ 急所間近を切り裂いても倒れなかった

男が銃弾ごときで倒れる？

そもそも、如何して今、その話を持ち出した？

「まあ少しこの話は置いておくとしよう」

ひとつの鉄格子の前で歩みを止める。暗がりには緑色を基調にしたジャケットを

纏った半人半竜が床に座り込み、爛々と輝く瞳でこちらを見ていた。

個体識別名ジョーイ。特務竜1の変わり者だ。

「君が審判の時、コードネーム・ランスロットと交戦した竜だね」

ジョーイは黙っていた。ロレッタもただ黙っていた。猛烈に嫌な予感がするが、最早どうしようもない事に気付いたのだ。

「第6廃棄区画。ああ、君らが良く屋外演習で使う場所だ。そこから南へ行つた絶海の孤島に……ある宗教団体の施設がある」

グリモア教団。思い当たるのはそれしかない。

「彼は、其処に向かつている」

ベオウルフは鈍色の端末を静かに取り出すと鉄格子に翳した。電子音が1つ響き、ロツクが外れた。

「あそこに行けば、もう1度彼に出会うことが出来るよ」

それは悪魔の囁き。己の楽のみを追う事を本能とする彼が、聞き逃す筈が無かつた。爆発的な狂気にも似た快楽の気配が空間を叩き、次の瞬間檻の奥からジョーイは飛び出し、2人の前を通り過ぎて風を巻き起こしながら出口へと走って行った。



「は……!?!」

追いかけてようとしたロレッタをベオウルフは手で制する。遠くで、警報音が響きシャッターが降りる音が連続する。

「少し話を逸らそう」

緊張を煽る音に包まれながらもベオウルフは平然と言った。何処かで、金属製のものが破壊される音がした。

「今、かの教団には竜王家の縁者が囚われていてね。彼女はその救出の為に統合世界に戻ってきている」

低い声が脳髓に響く。

「話を戻すよ。君には不慮の事故で脱走した特務竜の追跡を命じる。君の機動力で終える所まで追って、追跡困難になったら状況を終了してくれ」

ベオウルフはロレッタの背を押した。2、3歩前によろけたロレッタが振り返ると、彼は口角を上げて静かに笑った。

「あとは、存分に」

ロレッタは、ひとつ頷いて外を指す為に走り出した。彼女ほど速くないが、前へ、前へ。彼女に……ミドリに出会う為。会って、文句のひとつでも言っただけでやる為に。

×

遠い騒音の中、その通路でただ1人になった竜でもあり人でもある男は微笑みを濃くした。

否、ただ1人では無い。1匹の竜と1人の少女が去っていった方向とは真逆。ベオウルフの背後の暗がりからレオナルドが現れた。手には無刻印のマスターキーが握られている。

「ご苦労、レオナルド」

「……行かせて良かったんですか？」

「構わないさ。ああ見えても1企業を内部崩壊させた実績があるからね。少しの下準備の間、いない方が良い」

マスターキーを受け取りながらそう言う。視線は少女が走り去った先のまま。

「まずは1匹、そして1人」

喧騒の中の静寂とも言うべき矛盾した空気の中、男は佇む。

全ては屠竜者の描く未来へ。

## 2話 真夜中

## チトセ探偵事務所

ガサリ、ガサリ。埃っぽい乾燥した空気の中、切れかかった蛍光灯に照らされながらナトリは倉庫の隅に置かれた段ボールを漁って着々と準備を始めていた。

指ぬきグローブにメリケンサックを白衣に納め、安全靴を履いていると物音に気付いたチトセが部屋を覗き込んできた。

「……戦いにも行きはるん?」

「戦いじゃねえ、説得だ」

「装備に説得力皆無なんやけど?」

せやなあ、と言ってチトセは袴の後ろに挟んでいた小刀を見せた。

「刃物、いる?」

「いらねえ。世界共通語である拳で語る事に意味があんだよ。可愛い患者の恩人に手エ

出されるんだ……キツチリ拳で語ってやらねえと」

「あんたさんのそう言う熱いトコ好きやわあ」

小刀を仕舞いながらころろと笑うチトセ。

身支度を終えたナトリは立ち上がり、チトセとすれ違う。

「行ってくる」

「氣いつけてなあ」

手軽に言葉を交わす。手軽に送り出す。これが日常で今もこれからも変わらない。

「さあて。……たまには倉庫掃除でも」

袖に手を差し入れ紐を取り出し慣れたように襷掛けをする。先ずは小道具の類から手をつけ始めた。

???????

常界 上空

装着したゴーグルを掠める暴風の音が耳元に鳴り響く。人の営みを示す夜景は遙か奈落に、そしてそれも疎らになり、やがて潰えて自然のみが下の景色となった。

眼前にはただ星空のみ。箒型ドライバに跨り、遙か彼方を目指すロレッタはジャ

ケツトに顔を埋めた。上空の凍てつく空気は人間には厳しい。

「寒い……」

ぼやいた頃に、左耳に装着したインカムに通信が入った。

『えーと、通信テストにやん！ こちらトキワ、聞こえてるにやん？』

「こちらロレッツタ聞こえてる」

元気のいいトキワの声に安心する。

『位置は確認できてるにやん！ オペレーターは任せるにやん！』

「オーケイ。早速だけど予想到達時刻と円卓の状況を」

『ごめんとキワ君ちよつと変わって……こちらジョシユア、予想到達時刻はその速度を保ってそのルートなら3時間後だ』

そう聞いて眉をひそめる。時間がかかりすぎる。

「別ルートあるよな？」

『山間部を通るルートが』

インカムを介して小さいホログラムディスプレイが浮かぶ。北に大きく逸れるルートでそこから直進距離に第6廃棄区画、その先には海が見える。海岸からほど近いところに点滅する小さな島の様な四角があった。目的地だ。

「どのくらいだ」

『2時間！ 行ける？』

「山が多いから……出力上げて……吹き下す風を捕まえればもつと早く行ける」

と信じたい。と心の中で付け足す。風さえ捕まえばドライバ単体の最高速度を  
超えられるだろう。コツは摩訶不思議な配達屋から学んでいる。

『まじで？ 出来る？』

「出来るかじゃなくて、やるんだよ」

不敵にそう言い放って爆発的に出力を上げて北に逸れた。

箒の安定性を支援する複数の小型ユニットも推進力に回す。

金属の箒が風を切る。操縦者はただ前を見るのみ。

??

広大な廃墟群の上を豪速球で通り過ぎ、海岸の際に建つ廃ビルの屋上にスライディ  
ングしながら着地した。ゴーグルを勢いよく外し、首を振って固まった髪をほぐした。

『2時間切ったにやん……』

「へへっ……成し遂げたぜな……」

『ごめん訃報にやん』

「どったの」

『ナトリにやんもう着いてるにやん』

「嘘だろマジか」

一体どんな手を使って間に合ったのかあの歩く人外魔境。通常の手では無いのは確定だろうが。別種族の手でも借りたのだろう。

「あれ、か……」

『目視できる？　そこから先に見えるのがこの区画の人工島だ』

視線の先には海岸からだいぶ離れた絶海の孤島。大きい円柱を中心に四角形の積み木を乱雑に積み上げた様な外観をしている。

『元々なんかの研究施設だったようだけど、ここの引き上げ時に放置されたみたいだね。砂場を護岸して作ったんだって』

「……砂上の楼閣ってやつだな」

色味のないその島に特に何を思う訳でもなく目線を下に投げた。

眼下にはモーターボートが数台、繫留していた。しっかりした造りの物から木製の船にエンジンを乗せただけの物までまちまちだ。

「格好のアジトだな。屋外演習はここから数十キロの真反対だし、人目につかな……」

言い切る前に孤島からの発砲音を耳にした。

「どつちだ」

「どっちかな」

「円卓と先生の装備的に相手側だな」

「だろうなあ」

「少なくとも銃火器持ちか……骨が折れるな」

「そうだなあ」

「……!?!」

勢いよくバックステップで距離を取り箒型ドライバを構える。一切気配を感じなかった。今の今まで。

ロレッタが立っていた場所のすぐ真横にいたのはチャイナ服を身にとった茶髪で長身の男性だった。右目を囲うように緑色のフェイスペイントがあり、少なくとも人間ではない雰囲気醸し出していた。もっと上位に位置するような……。

「……竜族の方?」

「ん、正解。君は?」

人当たりの良さそうな笑みを浮かべる男性に少しだけ警戒を解く。

「ただの野次馬の人間です。後は、少しの助太刀です」

「そっかあ。気をつけてな、ちよっと前に円卓の騎士が突入したからそろそろ戦場になるぞで」



「そろそろどころか……貴方は？」

「俺？ んー、待機組かな？」

ベオウルフの言が正しければ竜族が出張っついてもおかしくは無い。竜王家の縁者なのだろうか。

「そうですか。……じゃ、乗り込むとしますかね」

「おっとちよつと待て」

屋上のふちに足をかけたロレッタを男性は呼び止めた。

「夜明けに全てが終わる。巻き込まれないようにな？」

それにどう答えるべきか悩んだ後、ロレッタは頷いた。

屋上から飛び降りる。落下中に箒型ドライバに跨り出力を上げて一直線に闇に浮かぶ孤島に飛んで行った。

「かつけーなー」

竜の男性、ヒスイ。彼はただその場で俯瞰するのみ。それが竜として、神としての在り方なのだ。

??

## グリモア教団本部 東館

勢いを殺さず全身を叩きつけて窓ガラスを突き破り着地した。ガラス片が床で跳ね返り軽快な音を響かせる。その空間は吹き抜けてドレツタはギャラリーに着いたようだ。

『ドレツター!!? 何で通信切ったてめー!!』

「は? 切ってねえよ?」

『嘘つけー! ネタは上がってんだからな!』

「どんなネタだよ」

呆れながらも今更気付く。男性と会話をしている時、到着まで途切れなかった喧しいほどの通信が無かった。あの奇妙な静寂は、男性が何かをしたのだろうか。どうも人間のテクノロジーは竜のテクノロジーに勝てないらしい。

つまりジョシユアとトキワはあの男性の存在を知らない。少しの逡巡の後、黙っておく事にした。ドライブバを金属球に戻し、シヨルダーホルスターに手を触れ悩む。

「ちよつと寄り道オーケー?」

『……何するつもり?』

「装備が心許ない」

??

重厚な鉄扉を押し開けスイッチを入れると薄暗い蛍光灯の下、武器庫の全容が開けた。

『目ぼしい物ある?』

「怪しいな」

空箱を蹴りながら言う。大半の物が持ち出された後のようだ。

「ホルスターと、スリングと、液体火薬、導火線、空き瓶……」

『火炎瓶作ーろー! にゃん!』

「雪だるま作る勢いでエグいの作らないで」

『火炎瓶はいいぞ。投げてよし、殴ってよし』

「……ん?」

『あ、ギルにゃん』

『暇だったのな』

ビクネームの到来に頭を抱える。ロレッタは知る由も無いが彼らは臨時会議室に機材を持ち込んでいるだけな為、その気になれば誰でも入れるが、何より使われない上半倉庫化し、ジョシユアやトキワを始めとする若手職員の隠れ家的存在になっている

ので、暗黙の了解でそつとしてきているのである。

ギルガメツシユは本当に暇で来たただけだ。

「まあいいか……火炎瓶作つといて、トカレフと……え、中折れ式の散弾銃？　熊でも打つてと？」

『酷い装備だな』

「まあ大量に仕入れるとなると粗悪な密造銃くらいしか無いですし期待した私が悪いとしか……」

碌な装備も確認せず飛び出して来たのだ。拳銃2丁とナイフ1本と小型爆弾数個しか無い。秘書試験で使った爆弾仕込みのジャケットが恋しい。あれはいざという時の切り札になる。

『液火は幾らか持つていけよ。即席トラップにも目潰しにも使える』

「了解です」

『持ち運べる物はあるか？　殴ったら痛そうな感じの』

「手頃なアタツシユケースが大量に」

『それから携帯出来ない大型の武器と素人には扱えない物を探せ。どつかに積み上がってないか？　大口径のライフルとか』

「……!!　リンクスGM6だ！　ロマン溢れる貫お!!」

『楽しそうで何より』

武器庫を見渡す。背丈ほど積まれた木箱を覗き込み、顔を顰める。どれも使えない事はないが癖のある物ばかりだ。

ギルガメッシュの指示を受けながらアタッシュケースに銃器を詰め込み弾薬を補充。スリングでライフルを背負い、最後とばかりに部屋を見渡して、隅に置かれた古ぼけた段ボール箱を見つけた。

近寄って中身を覗くと、無骨な部屋に馴染まない写真フィルムが大量にあった。

訝しげにひとつ摘み出し、円筒から引き出して蛍光灯に翳すと……。

本を読む少女が映っていた。

更に引き出すと興味深そうに海鳥を見つける少女、何かを書いている少女。

短髪で儀式に使うような服装をしている。全て同一人物だった。

ロレッタは幾つか写真フィルムを掴み出しジャケットに入れた。殆ど反射的だった。

『どうした?』

「最後の確認をしました。……全部終わったら、此方から通信をします」

『了解だ』

「最後にひとつ、夜明けまでどれ位ですか?」

『あと2時間』

「……ありがとうございます」

電源を切り、沈黙したインカムを懐に収める。鉄扉を開いて騒音のする場所へ走り出した。

???????

グリモア教団本部 西館

アスルは思う。

「おんどりやああああ!!」

何処からとも無く現れ「助太刀する」とだけ告げて一応味方側として戦っているこの白衣の男。テロ現場で良く見る白衣の男。

「根性足りてねーぞおおお!!」

メリケンサック仕込みとは言え徒手空拳のみで壁の様に立ちはだかる教団員たちを文字通り吹き飛ばすこの男。

「おらおらしつかり立たんかい!! それでもてめーら男かああああ!!」

本当にこの地上の文明に存在していいのかと。

てゆーか本当に医者なのかと。

「坊ちゃんそつち！」

「おう！」

反対側で散弾銃を構える教団員たちを槌を振るって鉄砲水を食らわせる。体勢を崩された教団員たちは奥へ流された。

「先行け坊ちゃん」

「は!? この人数1人じゃ無理だろ!?!」

「行けよ。この先に気配が2つある。どつちも魔物だ」

「!」

奥へ続く黒く淀んだ通路を見やる。心臓がやけに遅くなり、喉が閉まる。

この先に、奴がいる。

「行け」

白衣の男、ナトリの静かな一声に押されアスルは通路へ駆け出した。追跡しようとする教団員にナトリは掌底を打ち込んで沈黙させ別の教団員に投げつけ陣形を崩す。

「さて……次はどいつだ」

\*\*\*

## グリモア教団 地下工房

祝詞と呪詛を混ぜ合わせたような不気味な詠唱が可愛らしい声で紡がれる。薬草や動物のミイラが所狭しと並んだ工房で得体の知れない液体が満ちた大鍋をかき回すのは背丈の低い金髪の竜だった。

かき混ぜるたびに鍋から腐乱死体の様な不定形の生物が生み出され悪臭を放ちながら部屋の外へと這いずっていく。それらを避けて部屋に入ってきたのは長身瘦躯の竜だった。

「進捗は如何でしょう」

「おお、ティルソンか！ 上々だぞ、少なくとも壁にはなるであろうよ」  
腐乱した生物を一瞥しながらイネスは答える。

「ええ、それで十分です。彼らにはこれで十分過ぎる」

「くつくつ、任せるがいい！ 素材ならまだあるぞ！」

「それでは……私も現場に向かいますゆえ、引き続きお願いします」

「お主も行くのか？」



退出しかけたティルソンは振り返り怪しく微笑む。

「厄介な連中が混じっているのですね」

???????

ミドリとオリナは東館に踏み込む。前方、その空間の中央には浮遊する2体の自律型ドライバが炎と風を同時に放ってきた。

「師匠！」

「任せるアル！」

シルフが空間と同調しミドリの一撃を極限まで高め炎と風をかき消した。

それが合図だったように四方の扉が開かれ武装した教団員が雪崩れ込んで来た。

「数が多し……！……！……！こんな戦力何処から!？」

焦った様に呟くオリナ。教団員達の銃口が2人に向けられた時、一陣の風が空間を塗り替えた。

連続する発砲音、倒れゆく教団員、発砲を続けながらもオリナとロレッタの元へゴーストで目線を隠し、ライフルを背負いアタッシュケースを提げた少女が風を纏って滑り込んで来た。空葉が床で跳ねて軽快な音が響く。

凛と前を見続ける少女の横顔にミドリは呆然とした。

何で、何でここに。

疑問と衝撃よりも大きく胸を占めた感情のままミドリは叫んだ。

「ロレッタ！」

彼女はニヤリと笑い、横目でミドリを見て言った。

「元氣だったか？　じゃじゃ馬め」

すぐに前を向いて告げる。猶予は少ない。

「時間がない。わかるな？　だが敢えて言おう」

アタツシケースを開く。中から弾倉と予備の拳銃が山ほど流れ出てきた。

銃器の山とロレッタを交互に見るミドリは彼女が何を言うかを痛いほど察した。

そしてオリナもその胸中を強く察した。

「躊躇うな、行け」

「ここは私たちが引き受ける！」

グロック17を構えるロレッタと2対の棍を構えるオリナ。2人の背中に頷きミドリは駆け出す。

言葉は不要。故に互いの道を行く。

??????

殿をつとめ、差し向けられた勢力を全て沈黙させ、西館に駆け込んだナトリは絶句した。

「あの餓鬼マジかよ」

しゃがんで環境を観察した。床が抜け落ち奈落が覗ける。残った瓦礫の割れ方からして中心の衝撃で連鎖的に崩壊した。つまりはアスルの一撃だろう。

さっきのド派手な破壊音の正体はこれか……。強くなつたもんだな。

基礎までやられたのか。まだか細い崩落が続いているようでパラパラと石が落ちる音がする。ここに留まるのは危険だろう。

一か八か飛び降りてみるか？　と思つた時。

粘性のものが這いずる音が背後から聞こえた。

不審に思い振り返つたナトリは遙か先の暗がりから悪臭と共に何かが這いずつてくるのを見た。

それは腐敗臭を纏う人型のなり損ないだった。

内臓の色をしたそれは崩壊と発生を繰り返し同一のシルエットを保てていない。全身から体液と血を吹き出しながらも自らを生かそうと脈動する。

平穩に浸かる人々の儚い精神を無情にも崩壊させる現象が今、彼の前で根付いていた。足に見える箇所は足と形容できず、瞳孔らしきものはその肉塊に存在せず、なら

ば、あれは息づくものを追って行動するのだ。

「……なるほどこれはキッツイなあ」

闇の力を収縮させ放つ。弾丸のように飛んで人のなり損ないの脇腹を抉り腐汁と血液を撒き散らしながら後方に吹き飛ばされ、床に叩きつけられた。

しかしそれはのたうち回りながら再生していく。

「うーん……こいつあなあ」

悩んだふりをして、背後の大穴に飛び込んだ。

????

\*

オリナが自律型ドライバに最後の1撃を見舞うのとロレッタが最後の1人に弾丸を撃ち込むのは同時だった。

唐突に訪れた重いくらいの静音。たつぷり間をとって2人同時に深く息を吐いた。床に散らばった夥しい数の空薬莢が不気味に煌めく。

「はあああ、これで全部……だと思いたいね。どう思う？ えっと、」

「ロレッタ」

「ロレッタさん」

「ここに配置されてたのはこれだけで終わりでしょう。……ライルさんと合流するのでしょう？ 早く行つた方が良いでしょう」

「あなたは？」

「調べたい事があるので単独行動させてもらいます」

アタツシケースに残弾をしまつて立ち去る準備を万端にしたロレッタは言う。

「……大丈夫？」

「大丈夫ですよ。何より、攻撃してくる奴らはこれで全部でしょう」

これ、とライフルで腐臭を発し始めた教団員の死体を指し示す。

「あのね？ 正面の警備が解かれてたんだよね……」

「こちらも……武器庫も見張りがいませんでした」

「何か起ころうとしてる？」

「でしょうね。仲間と合流するならお早めに。夜明けまでそんなにありません」

「わかつた。……貴女も、気をつけてね！」

奥へ走り去っていくオリナを見送つて、ロレッタもその場を立ち去つた。

???????

## 地下通路

アスルは焦りを感じた。

目の前で悠々と手を後ろに組み立つ男。

先程から、ありとあらゆる攻撃が通用しない。

攻撃を躲すだけでなく目視不可の刃を飛ばしてくる。既に全身は切り傷だらけで、自らの血の匂いに噎せそうになる。出血量の限界値を前にして、手先が痺れてドライバを上手く握れているかすら判断できない。

「でええええりやあああああ!!!」

激流を纏った渾身の一撃。

通路一带にヒビが入るほどの一撃。

やったか。

「惜しい、惜しい」

時が止まった。

背後から神経を蟲に食まれるような不快な冷たい声音。

振り向けば此方に迫る細く、長い手。

向こうの方が早い。

間に合わない。

あと数センチ。その手が、アスルに

「させつかあ!!!」

横からの闇の弾丸。否、魔弾。

数十数百の弾丸は全て男に命中し、その瘦軀をいとも簡単に吹き飛ばした。

「ナトリ先生!」

「おうおう立てや。逃げられなくなるぞ」

膝をついたアスルを引き上げ背を叩く。

「ナトリ先せえー!」

「オリナ! よく来た!」

「ナトリのおっさん!」

「うるせえ! まだ二十代だ!!」

負傷の多いアスルを後退させてライル、オリナと共に並び立つ。

「良いかてめえら、よく聞け」

収縮した影を数十発放ち、煙幕を作り上げた。

「上位種族つーのはな、タフだ。しぶといし生半可な攻撃は通用しねえ、しかも中には再生能力が半端じゃねえ野郎も混じってる。だからこそ、竜殺しやら神殺しやらが異端として見られる。ぶっちゃけこの戦力差じゃ駄目だから、頑張つて逃げつぞ」

ビヤン！ と風が渦巻き煙幕が晴れた。

「おや、悪巧みですか？」

男は、余裕を示すように悠然と手を後ろに組んで見せた。

「いいか、点より面だ。殺すつもりで丁度いい、精巧さは求めんな……全力で！ 広範囲で！ 高火力！ いいな!？」

4人は一斉に走り出し、各々武器を振り上げた。

瞬間、爆音。

???????

地下実験室跡

「……駄目だな」

そんな独り言を呟いてロレッタは手にした紙束を放り捨てた。



薬品棚に手術台、悍ましい数の紙、それと同数と見られるホルマリン漬けの内臓が薄暗がりの中に浮かび上がっている。

しかし等間隔に並べられているはずのそれが、歯抜けになっていたり。

シンクの深い実験器具清掃用の水道には、かなりの量の灰と、可燃性の薬品とライターが。

資料が軒並み持ち出されてるか、処分されている。やはり、この襲撃は予見されてたか、そもそもこの施設自体がデコイか。

残った紙束に記載されているのは既にロレッタの知識にある物で目新しいものは無い。

次の資料もそうだろうと軽く目を通したとき、その内容に気づいた。

『境界接続機構』

反射的にそれと付近にあった紙束を纏めアタッシュケースの隙間に捻り込む。

時間が無いため手短かに、必要とあらば直感にも従う。

もう一度部屋を見渡して見落としが無いか確認し、ライフルを片手に、アタッシュケースを片手に部屋を出た。

出て、直ぐ右通路にライフルを向けた。

「……物騒なの向けないですよ」

そこには青い祭祀装束を身に纏った水色の髪の男性が気怠げに腕を組んで佇んでいた。少年、と言つても問題無く、口元を布で覆いその表情は窺い知れない。

「敵か？ 味方か？」

「国家のスパイって言えば解る？」

「……なるほど。潜入調査」

「で、君も？」

「残念ながら野次馬です」

銃口を天井へ上げて一歩下がって背筋を正す。少なくとも攻撃の意思は無いようだ。

「となれば、不確定要素の確認ですかね」

「そういう事かな。……資料、何にも無かったでしょ？」

「一部は焼却処分されてましたね」

この男は何かを知っているのか、と半ば期待したが予想は裏切られた。

「ちなみに僕も知らないよ。上しか知らない。僕も結構貢献したんだけどなあ……ま、予想通りの切り捨て組だよ」

「上層部について何か知りませんか？ 聞く限りでは竜族が実権を握っていたと」

「……………野次馬相手なら話してもいいかな。そうだよ。しかもただの竜じゃ無い」

集めた情報に思う所があるのか、眉を擡めて言い放った。

「血が古い、真祖に近い竜族たちだよ」

ロレッタは顔を擡める。

竜王家の中核を成す竜たちがいる。

竜の起源とも言われる最古の王から血を分けられた存在。

現在の竜王ノアなどがそれに該当する。

言わば竜達の基盤とも言える者たちが、何故。

「どうも面倒ですね……」

「そうなんだよ。特に古い竜の技術は魔法と言っても謙遜無いくらいだし……ほら、後ろのそれも……」

言い終わらせる前にロレッタは振り向きアンダースローで背後の暗闇に火炎瓶を投げた。既に導火線に火は付いている。

瓶が割れ、弾けた火薬に引火し、そこに居た内臓を粘土のように捏ねくり回した人間のなり損ないが炎に包まれた。

キヤアアアアアアアああああああああああああああああああああああ

!!!!!!!  
ひしゃげた声帯が壊れた笛のような音を鳴らす。

それらに向けた腕をそのままに、手首を軽く回せば風が渦巻いて炎が更に勢いを増し、さながら大火災のように通路を覆った。

熱風に煽られながらロレッタは激臭に袖で鼻を押さえた。

「人の焼ける臭いがする」

「まあ元人間だし」

ヒュン、と風切り音。炎の中からロレッタに向かつて何かが進んできた。反射的に伏せたが、それは男の動作と共に一瞬で出現した氷の壁に阻まれた。

風を乱回転させ氷の壁ごとそれを貫く。

氷が砕け散る音と獣の狂騒が混ざり合い、人間のパーツで出来た様な犬がドツと倒れ伏した。

「……元人間だつて?」

「そ。神のテクノロジーの劣化版。通常では知覚できない様な深層に触れて、姿形を失った人間たちを汲み上げて使う」

不定形の犬が長さの異なる四肢を動かしながら立ち上がろうとするのを見て、男は氷の刃を出現させ、四肢を切断した。

2度と立ち上がれなくなったその犬を覗き込んだ。

笑っていた。

その胴体に練りこまれた人の顔が、満面の笑みを浮かべていた。通路の奥へと目をやれば、同じ様な人、犬、人。

明確な形が与えられ、形にならなかつたモノが蘇る。肉塊は嬉しそうに笑っていた。

「……、」  
平時の冷静な演技を忘れ、息を飲んだ。

人間。

この不浄の塊たちが同種族と思いたくなかつた。

「まだ火炎瓶はある？」

「……あります」

「ならヒトガタを頼む。僕は犬の方をやるから」

火炎瓶をふたつ、ライターで火を着けて放る。

液体火薬と人の脂肪が燃え上がり、歓喜にも似た絶叫が割れんばかりに響く。炎を飛び越えてきた犬たちは床から出現する水刃に貫かれ倒れ臥す。

狂音、激臭、歓喜の絶叫。

それらから目を逸らさぬまま、ロレッタは箒型ドライバを起動させ、振り上げ、振り下ろすと同時にエンジン部から暴風を叩きつけた。

人を焼くのに十分な炎は揃った。

更なる歓喜の絶叫は糸を切ったように途絶え、出来損ないのヒトも、犬も焼け切つて、一拍置いて灰となって溶けた。

残ったそよ風が灰を攫い、熱気が残る通路に渦巻いて、暫くして消えた。苦しい静寂を破ったのは、全てを終わらせる咆哮だった。

???????

叩きつけるような咆哮が聞こえた時、その場にいた者たちは皆顔を上げた。

「……………ライル！」

「おうよー！」

ナトリの号令と共に数十数百の闇の刃が竜と半神の男女目掛けて飛ぶ。

ライルはその大剣、カリブルヌス突き立てた。直後に氷の壁が出現し、通路を隔てる。

遠ざかり行く足音。

サマエルとマハザエルが氷壁を壊そうと手を前に突き出すのを、テイルソンは制した。

「……良いのですか？ テイルソン様」

恐る恐るといったサマエルの問いに、テイルソンは深く、満足そうに頷いたのだっ

た。

???????

「走れ走れ走れ!! 世界新出す気で走れ!!!」

「待ておっさん!」

「うるせえ! お前と同じ年だ!!」

「何で男2人抱えて走れる!?!」

「医者だから!!」

既に火の手が回り始めた回廊。

ライルとアスルを脇に抱えたナトリに追走するオリナ。その先頭を途中から加わったアマイモンと、ナトリの元患者であるオリエンスが走る。

「傷触らねーいい持ち方だろ!?!」

「重傷者を運ぶ抱え方じゃねえ!……アスル? おい! アスル!?!」

「ナトリ先生! アスル気絶しちやつてる!」

「気にするな!」

「気にして！」

抱え直すアスルの無抵抗さが重傷の度合いを物語る。それこそ物の様に沈黙していた。

「おいワン公！」

「ジャツカルだ！」

「次どつちだ!?!」

「そこを左だ!……合ってるよな?」

「合ってるよー!」

アマイモンとオリエンスの指示通り通路を曲がった直後、今までいた場所の天井から崩れ落ち、火の粉が散った。

火の回りが異常に早い。

理由はただ一つ。竜という上位種族の自身の命を糧にした捨て身の特攻の炎だからだ。

命を糧にする。

その凶悪さを呪術師紛いの医者であるナトリは良く知っている。

対価にする命が刻んだ年月が長ければ長いほど、血が上位であればあるほど、対価として得られる物の純度は上がる。



発火点から遠く離れたこの場所すら大火災となっているのが良い証拠だ。  
対価が竜王そのものなら、その応酬は最上級の炎となるだろう。